

# 楠木谷窯・小溝上窯

—肥前地区古窯跡調査報告書 第4集—

1 9 8 7 · 3

佐賀県立九州陶磁文化館

## は じ め に

肥前の陶磁器の歴史については近年の調査研究によって、その大筋はつかめてまいりました。当館では、その細部についても順次調査研究を進めて、より一層の解明につとめています。

61年度は、初期色絵の問題に関わる年木山のうち、楠木谷窯の調査を実施し、また、唐津系陶器窯から陶器・磁器併焼の時代へと移る窯の一つ、小溝上窯に焦点を当て、それぞれの問題を明らかにすべく調査を実施し、有田における磁器焼成開始から17世紀中葉における技術の大きな変化に至る時期の貴重な考古学的資料を得ることができました。

本書を刊行するにあたり、御指導御協力をいただいた関係各位に深く感謝いたします。

昭和62年3月31日

佐賀県立九州陶磁文化館

館長 久間三郎

# 例　　言

1. 本書は昭和61年度の国庫補助金の交付を受けて実施した「肥前地区古窯跡詳細分布調査」の報告書である。

2. 本書は昭和61年度調査対象分の

　イ. 楠木谷窯（佐賀県西松浦郡有田町泉山）

　ロ. 小溝上窯（佐賀県西松浦郡有田町西部字上迎ノ原）

の発掘および分布調査の成果を中心に編集した。

3. 本書の執筆・編集は大橋康二が担当した。

4. 遺物実測図のうち、

　●は青磁。◎は鉄釉。断面部分の■は陶器であることを示す。「ハリ」とは焼成時に底裏を支える小円錐形のハリの跡があるもの。「砂目」とは焼成時、砂目を置いて重ね積みしたもの。「胎土目」とは、砂目の替りに胎土目を置いて重ね積みしたものである。

5. 本事業については、次の方々の協力を得た。

有田町教育委員会社会教育課長下野留次、課長補佐大串忠弘、主事高峰智晃、同秋月和道、同原口誠、同北川邦男、同久保田洋司、嘱託村上伸之、建設課主査江崎幹夫、同町歴史民俗資料館学芸員尾崎葉子、慶應大学院生森本伊知郎、地主中島秀次、田代忠男、金ヶ江喜佐男、館林喜助

## 本　文　目　次

I 調査の経過	1 頁
II 遺跡の概要	2 頁
III 遺　　構	5 頁
IV 遺　　物	13 頁
ま　と　め	27 頁

## 插　図　目　次

Fig. 1 古窯跡位置図	3 頁
2 楠木谷窯地形図	6 頁
3 楠木谷 2 号窯 A T 平面図と断面図・出土品	7 頁
4 楠木谷 2 号窯物原 B T 断面図	8 頁
5 小溝上窯地形図	9 頁
6 小溝上窯 A T・B T 平面図・断面図	10 頁
7 小溝上窯物原 C T 平面図・断面図	11 頁
8 楠木谷 2 号窯 B T II 層出土品	14 頁
9 楠木谷 2 号窯 B T 出土品	15 頁
10 小溝上窯 A T・B T 出土品	17 頁

11 小溝上窯 C T 北壁断面より採取されたもの	18頁
12 小溝上窯 C T II 層出土品	19頁
13 小溝上窯 C T II・III 層出土品	20頁
14 小溝上窯 C T IV・V 層・地山直上出土品	22頁
15 小溝上窯 C T 出土品	24頁
16 小溝上窯のサヤの銘款拓本	25頁

## 表 目 次

表 小溝上窯 C T 土層別出土量	26頁
-------------------	-----

## 図 版 目 次

P L. 1-1	楠木谷窯（北から）
1-2	楠木谷2号窯焼成室と溝（A T）（南西から）
1-3	楠木谷2号窯焼成室（南から）
P L. 2-1	楠木谷2号窯焼成室白磁皿出土状況
2-2	楠木谷2号窯物原（B T）（南から）
2-3	小溝上窯（西から）
P L. 3-1	小溝上1号・2号窯焼成室（A・B T）（西から）
3-2	小溝上1号窯焼成室陶器出土状況
3-3	小溝上窯物原（C T）（西北から）
P L. 4-1、3	楠木谷窯遺物
4-2、4	長吉谷窯遺物
P L. 5-1～5	楠木谷窯遺物
P L. 6-1～3	楠木谷窯遺物
6-4、5	柿右衛門窯遺物
P L. 7-1～4	楠木谷窯遺物
7-5	長吉谷窯遺物
P L. 8-1～4	楠木谷窯遺物
8-5	長吉谷窯遺物
8-6	楠木谷窯遺物
P L. 9-1	楠木谷窯遺物
9-2～5	小溝上窯遺物
P L. 10-1～8	小溝上窯遺物
P L. 11-1～6	小溝上窯遺物
P L. 12-1～6	小溝上窯遺物

# I. 調査の経過

## 1. 調査に至る経過

肥前地区には江戸時代の古窯跡が300ヶ所以上分布している。そのうち発掘調査が行われ、窯の構造、規模、年代などが明らかになったものは、佐賀県内ではわずか20ヶ所に過ぎない。多くの窯跡が遺存状態さえ不明のままといってよい。もちろんその製品や焼成技術の特徴は一部しか知られておらず、肥前陶磁の変遷の中に占める位置の明らかでない窯跡が多い。現在の急務は肥前陶磁の製品と焼成技術の時代変遷を明らかにすることである。そのスケールをもって各古窯跡の適正な位置づけを進め、次に同時代における古窯跡間の比較検討によって各古窯の特質を解明することが必要である。

本事業は、製品、技術の変遷を知るうえで重要とみられる古窯跡を選定して調査・分析を進め、あわせて調査の結果を将来の計画的な保存活用の判断材料とする。

昭和61年度は楠木谷窯、小溝上窯の発掘調査、分布調査を実施した。また、それらの窯の年代、製品の特徴を明らかにするために、出土品などの整理分析を行い、61年度事業を終了した。

## 2. 調査組織

### ○調査団長

久間三郎 佐賀県立九州陶磁文化館長

### ○調査員

前山 博 佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長

大橋康二 佐賀県立九州陶磁文化館資料係長

吉永陽三 佐賀県立九州陶磁文化館学芸員

鈴田由紀夫 同 上

宇治 章 同 上

### ○事務局

松田 徹 佐賀県立九州陶磁文化館副館長

古賀敏治 佐賀県立九州陶磁文化館総務課長

相川正之 佐賀県立九州陶磁文化館総務課主事

浦川信子 佐賀県立九州陶磁文化館総務課主事

福島晴人 佐賀県立九州陶磁文化館総務課員

## II. 遺跡の概要

### 1. 楠木谷窯

楠木谷窯跡は有田町泉山の英山南麓<sup>ひなぶなやま</sup>にあり、泉山磁石場の西約350mと、もっとも磁石場に近接した窯跡である。西側約100mには枳藪窯跡<sup>けずやぶ</sup>があるが窯跡の面影は認められない。

古伊万里調査委員会編『古伊万里』昭和34年は創業時代の磁器窯址の一つとして楠木谷窯をあげ、観光資源保護財団『有田古窯跡群と町並、第Ⅰ次窯跡編』昭和55年はこの窯の年代を「江戸時代創始期（短期間という）」と記している。

この窯を調査対象として選んだ理由は、17世紀の記録である『山本神右衛門重澄年譜<sup>注1</sup>』、柿右衛門家文書「覚」、『承応2年（1653）万小物成方算用帳<sup>注2</sup>』にみえる有田皿山の窯場の一つ、「年木山」に注目し、その窯場に楠木谷窯が属すると推測されたからである。隣接する枳藪窯も「年木山」に属する窯と推測されるが、窯跡が壊滅状態であるため、楠木谷窯を選んだのである。

この「年木山」は、『山本神右衛門重澄年譜』に寛永14年（1637）の日本人陶工826人の追放と伊万里・有田地方の窯場11ヶ所を廃し、「黒牟田・岩屋川内皿屋より上年木山切り、上白川切り、合せて13山」に統合したとあるのが初見である。西有田町の『龍泉寺過去帳』には寛永21年（1644）に黒牟田山・上白川と共に「年木山」の名がみえる。そして赤絵創始の史料として知られる柿右衛門家文書「覚」に酒井田喜三右衛門つまり初代柿右衛門が東島徳左衛門から頼まれて赤絵付を試みたのは、もと「年木山」に居たころとある。そして工夫の結果、赤絵付に成功し、長崎で売始めたのが正保4年（1647）とある。そして『承応2年（1653）万小物成方算用帳』には有田皿屋の内訳として「外尾山、黒仁田山、岩屋川内山、稗古場山、上白川山、中白川山、下白川山、大樽山、中樽山、小樽山、歳木山、板ノ川内山、日外山、南川原山」とあり、岩屋川内山から板ノ川内山までは地理的に西から東へと順を追って列記されている。よってこの歳木山は現在の年木谷・泉山付近と推測される。

この年木山は『龍泉寺過去帳』（寛永21年から記載される）をみると、前述のように寛永21年（1644）にその名があり、続いて

慶安3年（1650）	年木山彦兵衛内方
ク	年木山刑右エ門
ク	年木山彦兵衛母
承応元年（1652）	年木山刑右エ門妻
明暦元年（1655）	年木山彦兵衛娘

とあり、このあとは貞享5年（1688）「年木山塙右エ門内」とあるのが最後で、「年木山」の窯場名はみられない。18世紀中葉以降の有田の『皿山代官旧記覚書<sup>注3</sup>』にも年木山の名はみられない。このように記録上の年木山は1640年代から50年代に集中しており、貞享5年（1688）の例が最後である。

なお、酒井田柿右衛門家所蔵の多数の土型の中には「年木山酒井田柿右衛門」、「酒井田氏年木山」などの刻銘がみられ、そのうち紀年銘のあるものは18~19世紀である。これらは初代柿右衛門が年木山から南川原に移ったのちも、赤絵や金銀焼付法を成功させた記念すべき元の居所である「年木山」を私称地名として用いたのではあるまいか。それはこの土型のう

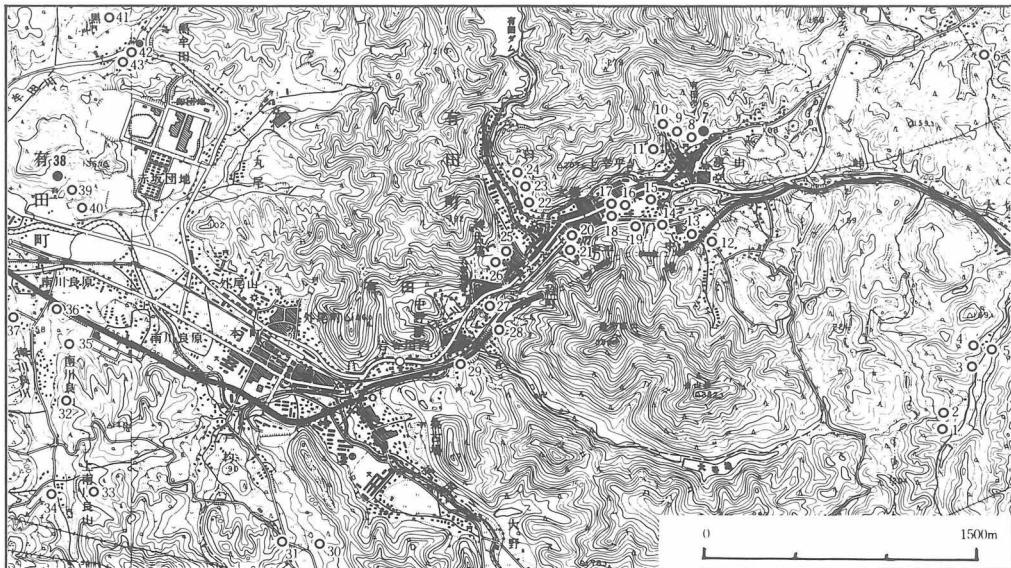


Fig. 1 古窯跡位置図

- |          |           |           |         |         |         |            |         |           |
|----------|-----------|-----------|---------|---------|---------|------------|---------|-----------|
| 1. 百間    | 6. 水尾窯ノ辻  | 11. 年木谷3号 | 16. 前登  | 21. 谷   | 26. 稗古場 | 31. 一本松    | 36. 小物成 | 41. 山辺田   |
| 2. 百間北   | 7. 捕木谷    | 12. 小樽1号  | 17. 西登  | 22. 下白川 | 27. 天神町 | 32. 柿右衛門   | 37. 天神森 | 42. 多々良ノ元 |
| 3. 窯ノ辻   | 8. 横籠     | 13. 小樽2号  | 18. 大樽  | 23. 中白川 | 28. 猿川  | 33. ムクロ谷   | 38. 小溝上 | 43. 多々良第2 |
| 4. ダンバギリ | 9. 年木谷2号  | 14. 山小屋   | 19. 舞々谷 | 24. 天狗谷 | 29. 長吉谷 | 34. 橋口     | 39. 小溝中 |           |
| 5. 空山    | 10. 年木谷1号 | 15. 中樽    | 20. 白焼  | 25. 天神山 | 30. 禅門谷 | 35. 南川原窯ノ辻 | 40. 小溝下 |           |

ち酒井田家以外の窯焼の土型には年木山の名を刻んだものではなく、それらは下南川原山と刻んでおり、また天保3年（1832）銘の酒井田和祐の土型には「下南川原山 歳木山」と刻まれていることからも、この「歳木山」は公的窯場名ではないことを示している。

柿右衛門家文書「申上口上」は前述の「覚」よりもあとに書かれたものとみられているが、この「申上口上」には「覚」と同様の内容を記したあとに続けて、「親柿右衛門儀、南川原へ罷在、御用物之儀者申すに及ばず」とあり、ここで「年木山」に代って「南川原」の住所名が現れるのである。これ以降の柿右衛門家文書や『皿山代官旧記覚書』にみられる柿右衛門はすべて「下南川原山」の釜焼（経営者）と記されている。

一方、18世紀以降の年木谷地区の窯場名は「泉山」と称されたことは、『皿山代官旧記覚書』や年木谷3号窯付近にある宝暦2年（1752）銘石碑に「奉寄進上泉山登釜焼中」と刻まれていることから知られる。

以上のことから、公的窯場名の「年木山」は前述の「承応2年（1653）万小物成方算用帳」に南川原山と併記されている「年木山」であり、その地点は南川原でなく、南川原の約7.5km東方で現泉山の内であったことは明らかである。

## 2. 小溝上窯

小溝窯址群は有田町西部字小溝にあり、二つの溜池を挟んで3ヶ所の窯跡が知られていた。前掲の『古伊万里』昭和34年はこれを上・中・下に分け、『有田古窯跡群と町並、第Ⅰ次窯跡編』昭和55年もこれに従って、上・中・下の名称を用いている。この名称については、中島浩氣『肥前陶磁史考』昭和11年では上窯のことを「小溝左窯」、中窯を「小溝右窯」と記している。

その年代については、『古伊万里』は「何れも慶長期創業の高麗窯であるが、中窯は早期に廃窯となり、上窯、下窯は磁器窯として暫く経営が続けられている」とある。

小溝窯址群については、『皿山代官旧記覧書』安永2年（1773）に家永壱岐守が「有田郷小溝原」に住んで焼き、そのご現在の土場を発見し、白川山の天狗谷に窯を一登り築き、磁器を焼いた、とある。また、佐世保市の今村家文書に、元禄6年（1693）の調べで古い窯場について記したものがあり、その中に「小溝山頭三兵衛」とある。さらに金ヶ江家文書「乍恐某先祖之由緒を以御訴訟申上口上覚」文化4年（1807）には先祖の唐人參平（金ヶ江三兵衛）は有田郷乱橋（現、三代橋）に居て、それから現在の泉山に陶石を発見し、最初は白川天狗谷に窯を築いたとある。この三代橋は現在では小溝に隣接した地名であるが、当時は広義の小溝原の中に入っていた可能性がある。

小溝窯址群は小溝原の北側に位置するが小溝原の南方には天神森窯址群、小物成窯址群があり、西側には清六ノ辻窯址群がある。これらはいずれも、唐津系陶器と磁器を焼造した窯跡である。

## 注

- 1 池田史郎「山本神右衛門重澄年譜」葉隱研究創刊号、1986
- 2 有田町史編纂委員会『有田町史、陶業編Ⅰ』1985のP.551
- 3 池田史郎編『皿山代官旧記覧書』1966
- 4 吉永陽三「柿右衛門家所蔵土型について」有田町教育委員会『柿右衛門窯跡第3次発掘調査概報』1979

### III. 遺構

#### 1. 楠木谷窯

楠木谷窯跡はすでに宅地化が進み、そのほとんどが破壊されているとみられたが、山側に畠地があり、窯尻付近が残存している可能性があったために、AT・BT 2つのトレントを設定した。両トレントはそれぞれ  $4\text{m} \times 1.5\text{m}$  の規模であったが、ATは焼成室の検出のため、途中で北側に  $1.5\text{m}$  拡張した。(Fig. 2)

発掘の結果、ATで窯の焼成室 1 室分と窯の外側に並走する溝を発見した。窯内には廃窯後に崩落した窯壁が充満しており、それを取り除くと窯床面から白磁皿の破片 127 点とトチソ 1 点が出土した。窯は南北方向の階段状連房式登窯と推測され、発見された焼成室は上部の 1 室とみられる。奥壁は高さ  $44\text{cm}$  程が残存しており、砂床の奥行は約  $195\text{cm}$ 、幅は東側を掘っていないので明らかでないが、掘った部分は  $214\text{cm}$  であるのでそれ以上の窯幅であることが判る。火床境は西側窯壁に接続する部分がわずかに残るほかは、火床部分とともに後世の搅乱によって消失していた。砂床と火床を合せた焼成室の奥行は  $260\text{cm}$  以上である。砂床面の傾斜は少なく、砂床の南側と北側（奥壁際）とのレベル差は  $8\text{cm}$  位である。(Fig. 3)

焼成室の西側には新旧 2 本の溝が並走している。東側の溝の方が古い。この溝内から窯道具や染付皿片が少量出土している。この溝の西側には地山を削平した平坦面があるが、トレント西端では岩盤部分がみられ、さらに西に崖状の人工段がある。窯構築時に、地山に対してかなり大きな加工を施したものとみられる。

BTでは窯の東側に形成された物原が検出された。厚さ  $10\text{cm}$  程の表土の下が物原の堆積層であり、西から東へと傾斜面を流れ下るように堆積し東側の谷を埋めている。Fig. 4 の II～IV 層に製品や窯壁片が多いが、Fig. 4 の 7 の黒褐色土層は製品などを含まず、築窯前の旧表土の可能性が強い。

窯跡は AT で発見された窯体のほか、その西南方に奥壁の一部と思われるものが現地表に遺存している (Fig. 2)。その南側の畠地には陶片、焼土の散布がみられるので、窯は AT で発見された窯体とは別に西側に少なくとも 1 基の窯がある。これを 1 号窯と名付け、新たに AT で発見された窯体を 2 号窯とする。

#### 2. 小溝上窯

小溝上窯跡は陶片や窯壁片の散布する広い範囲のうち、窯体が残っている可能性の高い部分に AT・BT のトレント、物原とみられた部分に CT トレントをそれぞれ設定し発掘調査を行った (Fig. 5)。AT・BT は両トレント合せて  $10\text{m} \times 2.2\text{m}$  程の規模であり、CT トレントは  $15\text{m} \times 1.5\text{m}$  である。

発掘の結果、東西方向に設けられた AT・BT で 2 基の窯の焼成室が発見された。2 基の窯の新旧関係をみると、東側の窯が古く、西側の窯を築く際に、東側の窯を埋め立て排水用の溝を掘っており、その溝が古い東側の窯の奥壁や砂床面を壊している (Fig. 6)。古い東側の窯を 1 号窯、新しい西側の窯を 2 号窯と称す。

BT トレントで発見された 1 号窯の東側壁の保存状態は良好であり、奥壁に近い部分では床面から約  $97\text{cm}$  の高さまで残存していたが、西壁は 2 号窯を築く際に壊されたものと思われ、

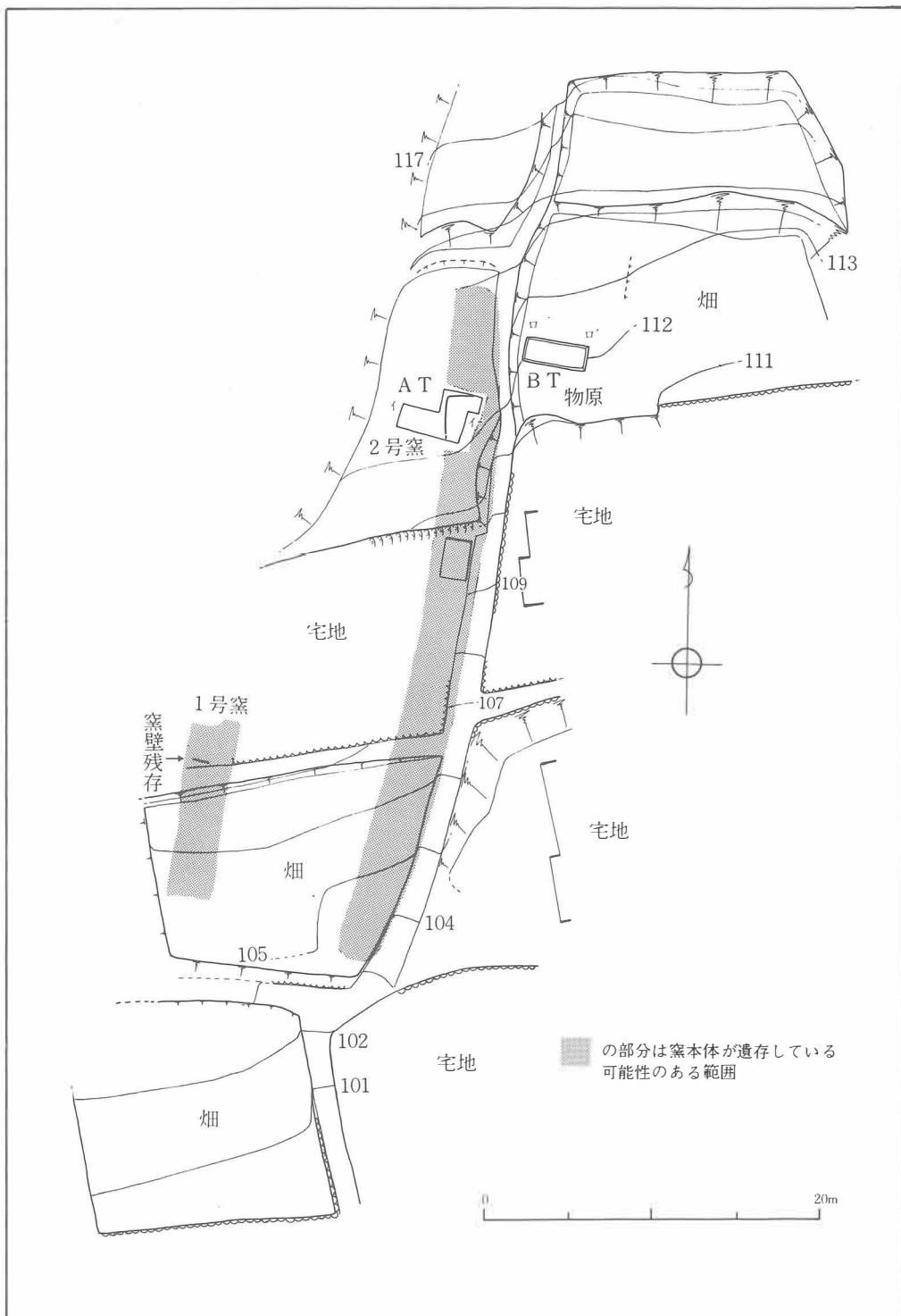


Fig. 2 楠木谷窯地形図

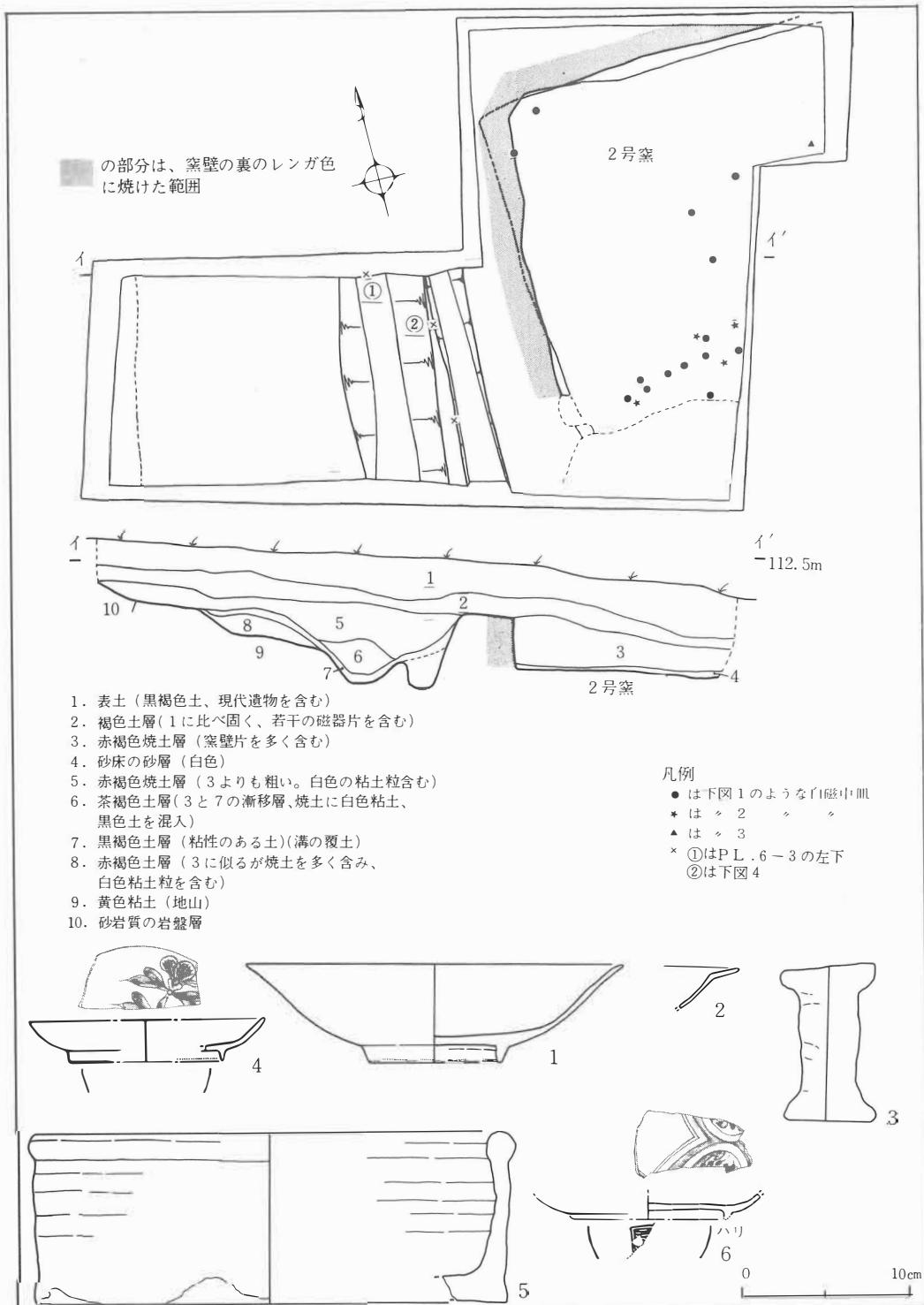


Fig. 3 楠木谷 2号窯 A-T 平面図と断面図・出土品

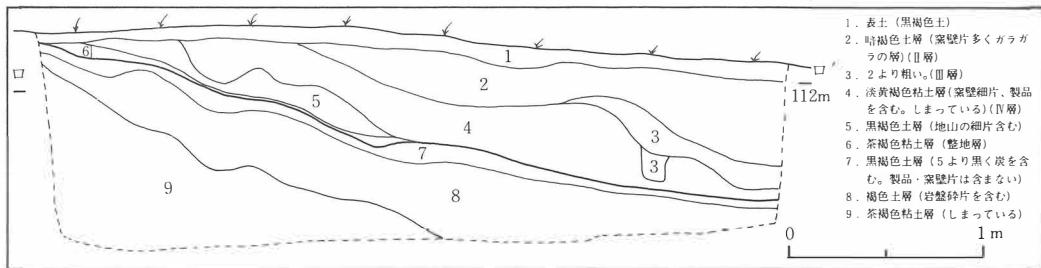


Fig. 4 楠木谷2号窯物原B T断面図

床面から約30cmの高さが残存していたに過ぎない。床面上に最初に堆積したFig. 6の19の層は窯壁片が西半部に厚く、東側へと少なくなっている。このことは西側壁を2号窯築窯時に人為的に破壊したためかと思われる。床面とFig. 6の19の間に腐蝕土の堆積が認められないことは、廃窯後、短期間のうちに破壊されたことを物語るように思われる。窯壁片堆積層の上の18の層は地山の粘土を客土したものであり、人為的な整地層とみてよからう。さらに、Fig. 6の17、16の土の埋立てによって整地を行い、2号窯の窯外側の地形を整えている。なお、18の整地層からは砂目積の灰釉陶器皿、とくに灰釉溝縁皿が主に出土した。灰釉碗も多い。鉄釉碗は少量であり、ほかに鉄絵皿の細片や肩に貼付縄目文のある甕片が少量出土している。磁器としては碗と皿が少量みられ、窯道具はトチンが多い。

この2号窯築窯時に、2号窯壁の東外側に溝を掘削しており、溝底は北から南へと下るように造られたため、1号窯奥壁を壊し、1号窯床面を北から南へとだんだん深くなるように掘っている。トレント南壁部分では1号窯床面を深さ26cm掘り込んでおり、その溝底幅は10cmである。平面では明らかにできなかったが、1号窯奥壁左隅部あたりに2号窯の上屋の柱を据えたものとみられ、Fig. 6のイ断面図に溝と重複し、1号窯窯壁を柱穴壁として利用したFig. 6の15が柱穴跡とみられる。溝の底付近にはサヤ (Fig. 10-14) が3個体分程まとまって得られ、さらに溝の覆土からは砂目積の鉄釉溝縁皿 (Fig. 10-11)、灰釉溝縁皿、灰釉を全面に施釉した皿が得られ、磁器としては瓶の口縁部と染付皿の細片が少量出土している。窯道具は大形トチン (Fig. 10-13) やハマ・トチンがみられる。

1号窯の規模は砂床中央付近の幅239cm、砂床の奥行182cmであり、砂床面はほぼ水平である。奥壁の高さは次室の温座の底面が残っている部分で測ると、高さ96cmと比較的高いことが注意される。火床境は右側壁際がわずかに残存しており、その幅は24cm、高さ9cm程である。砂床面には微砂の上にかなり粗砂が残っており、そこにFig. 10のような位置に灰釉陶器碗2点と砂目積溝縁皿1点が残されていた。火床にも粗砂がみられ、その下は灰色の固い面をなす。この火床では灰釉陶器碗2点とトチン1点が出土した。1号窯の東側1m程に溝状の凹みがある。この付近からは遺物の出土はほとんどみられなかったので、窯の物原は西側に設けられていたと思われる。

2号窯は1号窯の床面より約30cm高いレベルに床面を設け築窯したのであるが、窯壁の保存状態は極めて悪い。奥壁右半部から右隅の窯壁が高さ3~15cm程残っているほかは、窯壁の裏の粘土がレンガ色に焼けた部分をたどって焼成室の輪郭をおおよそ知り得たのである。しかし南半部はさらに大きな削平によって全く消失していた。2号窯砂床の幅は225cm程を

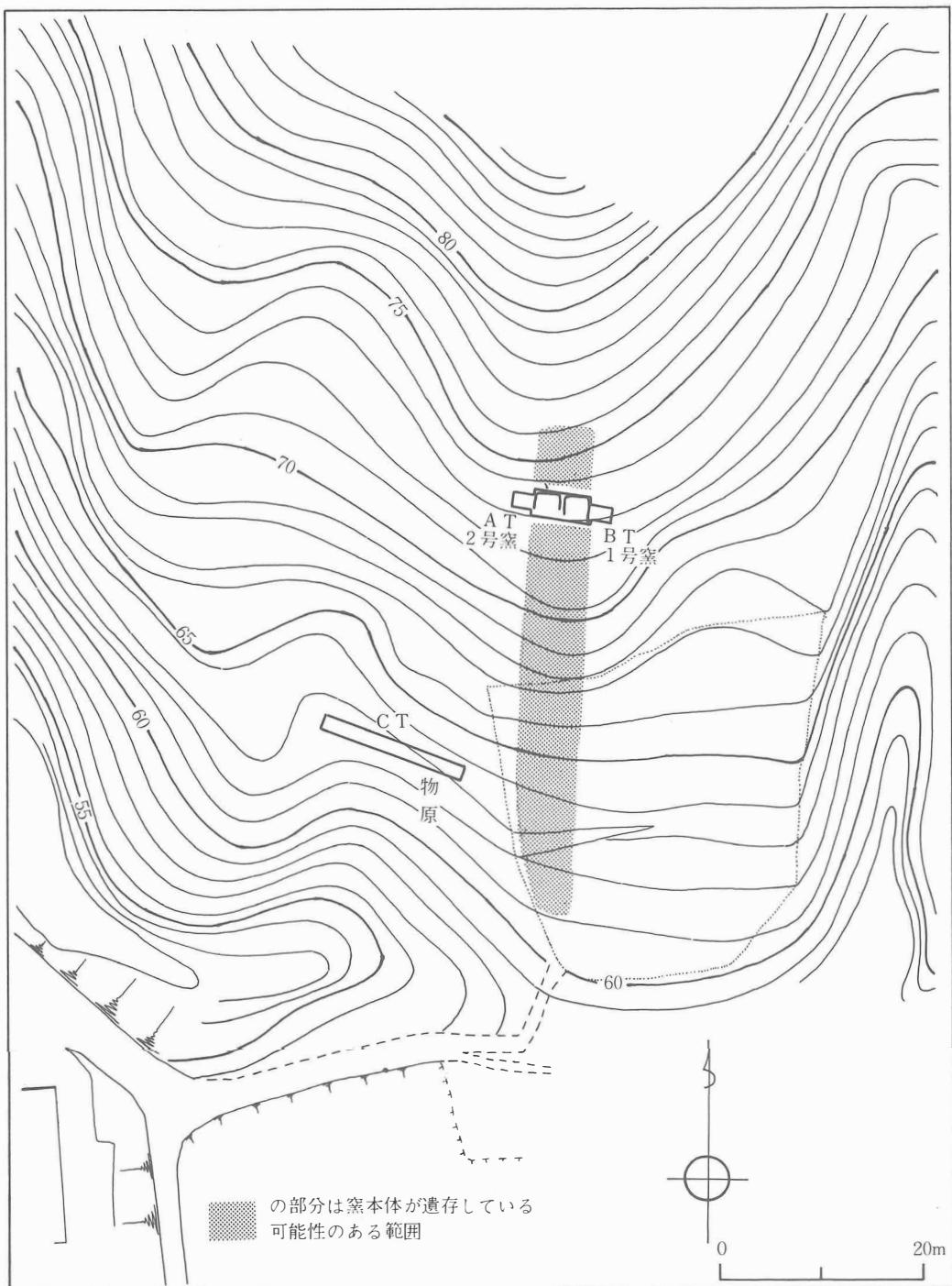


Fig. 5 小溝上窯地形図

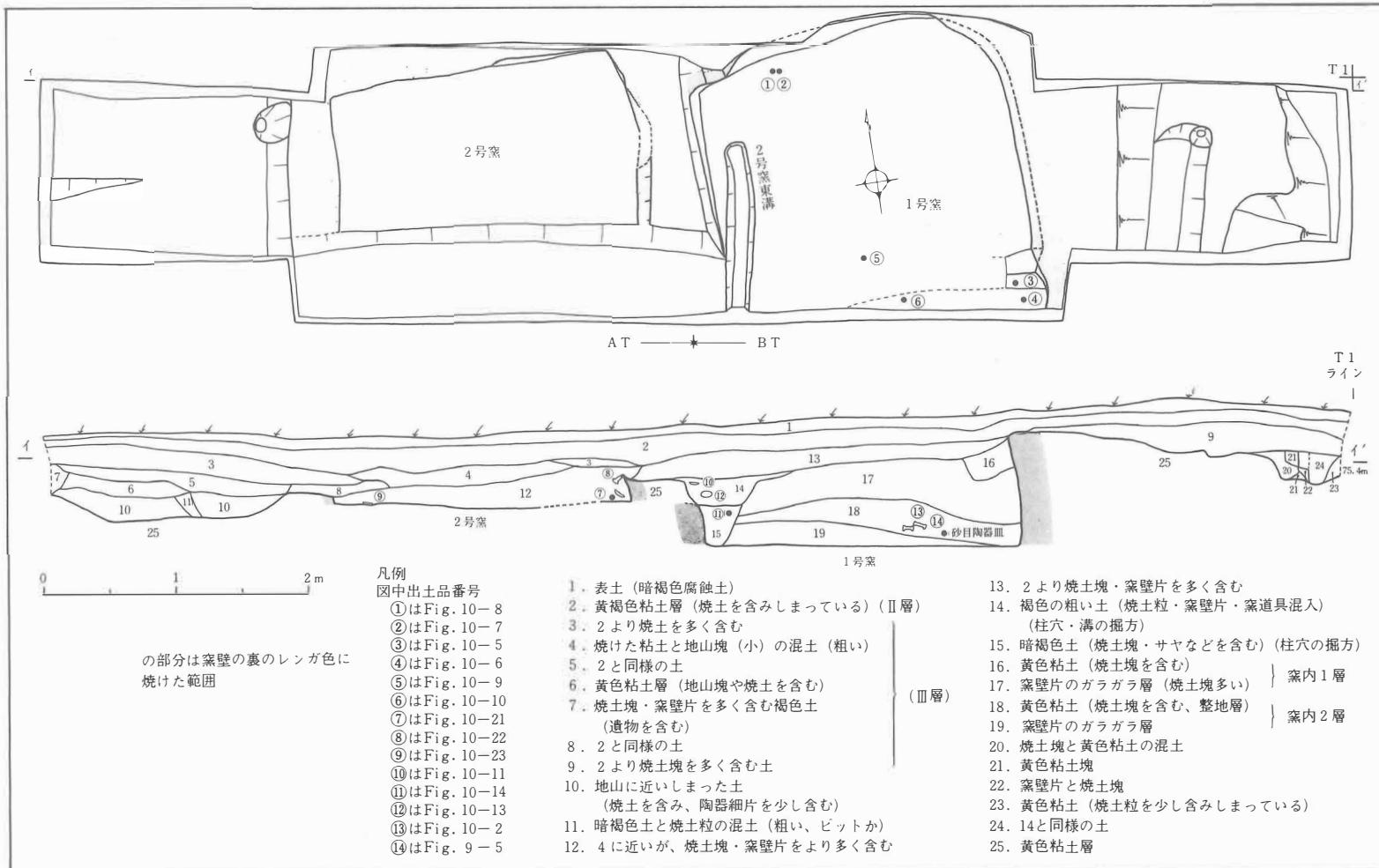


Fig. 6 小溝上窯 A T · B T 平面図・断面図

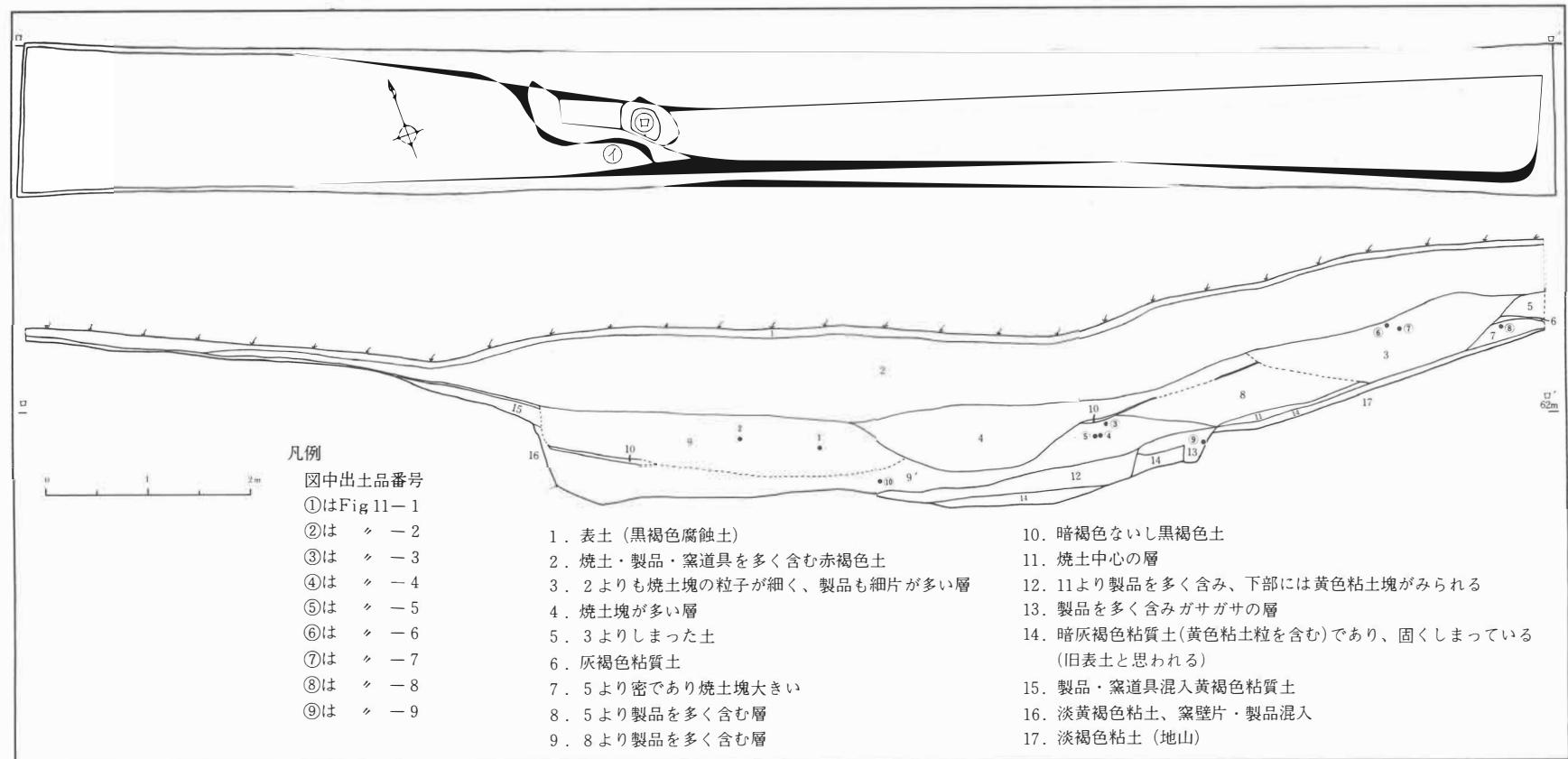


Fig. 7 小溝上窯跡原 C T 平面図・断面図

測り、比較的残存していた右奥部の砂床付近で染付碗と皿 (Fig. 10-21, 22) が出土した。2号窯の西側の窯壁の外側に上屋の柱穴がみられる。深さ約53cm。この西側からは陶磁片などの出土が比較的多く、さらに西方が物原となっているものと推測される。

この1・2号窯周辺からは陶器と磁器が出土し、磁器はとくに2号窯側に多くみられた。陶器の目積はいずれも砂目積であり、確実に胎土目積とみられるものは出土していない。また鉄絵のある陶片も極めて少量であった。

物原の調査はA・B Tより下方26mの谷状の部分に対して東西方向のC Tトレーナーを設けて行った。その堆積状態はFig. 7のように東から西へと斜面を下るような土層堆積がみられる。もっとも凹んだ部分の堆積の厚さは165cm程である。堆積の中ほどにFig. 7の10のように暗褐色ないし黒褐色土の薄い層がみられるが、中央部や東部ではみられない。この断面図からみると、中央部や東部では10の薄い土層の堆積後に掘削が行われたものと推測される。製品をもっとも多く含むのは別表のようにII層とIII層である。II層はFig. 7の4、9付近であり、III層は9と8付近である。ちなみに次のIV層はFig. 7の12や13であり、V層は14、東部II層およびII層深部は3、東端II層は5、7付近である。これらは斜面に複雑に流入堆積した土層であるため、実際、層位的に発掘することは困難であったから断面図の土層と一致させて考えることは無理があるが、一応の目安としておく。

採集された製品の内容をみると、後から動かされた可能性のあるII層は別として、その下方のIII層、IV層、V層は砂目積の陶器が主であり、胎土目積陶器の割合は4%以下と少ない。ところが、地山直上では18%と増え、さらに東部になると77%以上と多くなり、東部の地山直上では出土量が少ないが、砂目積のものは1点もみられず、胎土目積陶器ばかりであったことが注目される。磁器の出土量もまた東部では少なく、東部地山直上では全くみられなかった。西部では反対に胎土目積の陶器が少ないと、物原の形成が窯体に近い東側から順に厚さを増し、西へと拡張されていったことを物語るものであろう。西部にみられる高さ80cm程の段は地山の粘土によって形成されているが、この土の中には砂目積の鉄絵陶器皿などが含まれており、客土されたものと推測される。前述の黒褐色土の薄い層の堆積はこの段の部分で、同様に段を成して西へと続いているため、この段は比較的長期間存在していたものと思われる。Fig. 7の2の厚い堆積層は窯操業期に堆積したものとは思われないので出土品内容の統計表からは除外した。

以上のようなC Tにおける製品の出土状況をみると、早く堆積したとみられる東部の下層では胎土目積の陶器が主体であったが、この胎土目積の陶器はA・B Tではみられなかった。よってこれらの相対的に古い陶器のみを焼造した窯体が別にあると推測される。すなわち小溝上窯跡は新旧3基以上の窯から成るものとみて大異あるまい。

## IV. 遺物

### 1. 楠木谷窯

楠木谷2号窯の調査で得られた出土品と周辺の採集品を順次説明する。

#### 〈製品〉

##### 2号窯焼成室内

焼成室砂床面から127片の白磁中皿が出土した。これらの口縁形態をみると、Fig. 3-1のように胴部から口縁部がいくらか外反するもののほかにFig. 3-2のように口縁部折縁の皿がある。前者とみられるものは111片あり、そのうち高台部は3点である。高台内にロクロ削り痕がみられ、焼成が甘いために釉色は黄ばんでおり細い貫入がみられる。後者の折縁皿とみられるものは16片あり、焼成は十分で器壁は薄く釉色は乳白色に近い。これらはサヤに装着せずに焼かれたものと思われ、内面にも降灰の跡のみられる破片が多い。

##### 2号窯西溝内

Fig. 3-4、PL. 6-3の左上は溝内から出土した染付花卉文小皿。PL. 6-3左下は西側溝底から出土した染付小皿。見込には釣人図を描いているらしい。両者とも後述する小皿B群であるが、西側溝より古い東側溝壁付近から出土した染付小皿はA群タイプのものであった。小片であり文様は明らかでない。このように2本の溝内から出土した3点の小皿片のうちA群の小皿片が古い東側溝から出土したことは注意しなければならない。

#### 物原

物原に対して設けたBTから出土したものをみると、染付小皿が主であり、他に染付手塙皿、染付碗、青磁壺などがある。

染付小皿は大別すると2群あり、一つはFig. 8-1~9、Fig. 9-5のように器壁が厚く、口径に占める高台径の割合が $\frac{1}{2.2} \sim \frac{1}{2.55}$ である。高台の幅が比較的広く削りも荒いものである（A群と称す）。もう一つはFig. 8-10、11、Fig. 9-1のように器壁が薄く、口径に占める高台径の割合は $\frac{1}{1.52} \sim \frac{1}{1.89}$ と大きい。高台の幅は薄く削りは丁寧である。前者の場合、丸皿形（Fig. 8-1~7）と口縁部を微妙に外反りとしたもの（Fig. 8-9）、および側面を型打成形によって輪花形に作るもの（Fig. 8-8）がある。後者も同様に丸皿形（Fig. 9-1）、口縁部外反りの皿（Fig. 8-10、11）と型打成形による小片がみられる。薄手のB群にはFig. 9-1のように高台内にハリ支えの跡を残すものがあり、また高台内中央に二重方形枠内に福字などを染付したものがある。

この小皿にみる2群は、高台径の割合が小さく17世紀前半の小皿の特徴により近いA群から、高台径の割合が大きいB群へと移行したと考えるかどうかが問題となる。発掘された他窯の小皿と比較すると、A群の小皿のうちFig. 8-4は長吉谷窯（有田町）の小皿（PL. 4-2）と見込の梅の折枝文、内側面の三方の魚文、高台径の割合の小さいことなどが共通であり、楠木谷窯の方が文様の崩れが著しいにしても近似しているとみられる。またFig. 8-5は長吉谷窯小皿（PL. 4-4）と見込の草花文、側面の三方の魚文、外側面の折枝文、高台径の割合が小さいことなど酷似している。こうした内側面に描く魚文は窯ノ辻窯（山内町）などの窯ではみられず、反対に17世紀後半に量産された染付龍鳳見込荒磯文碗・鉢の内側面

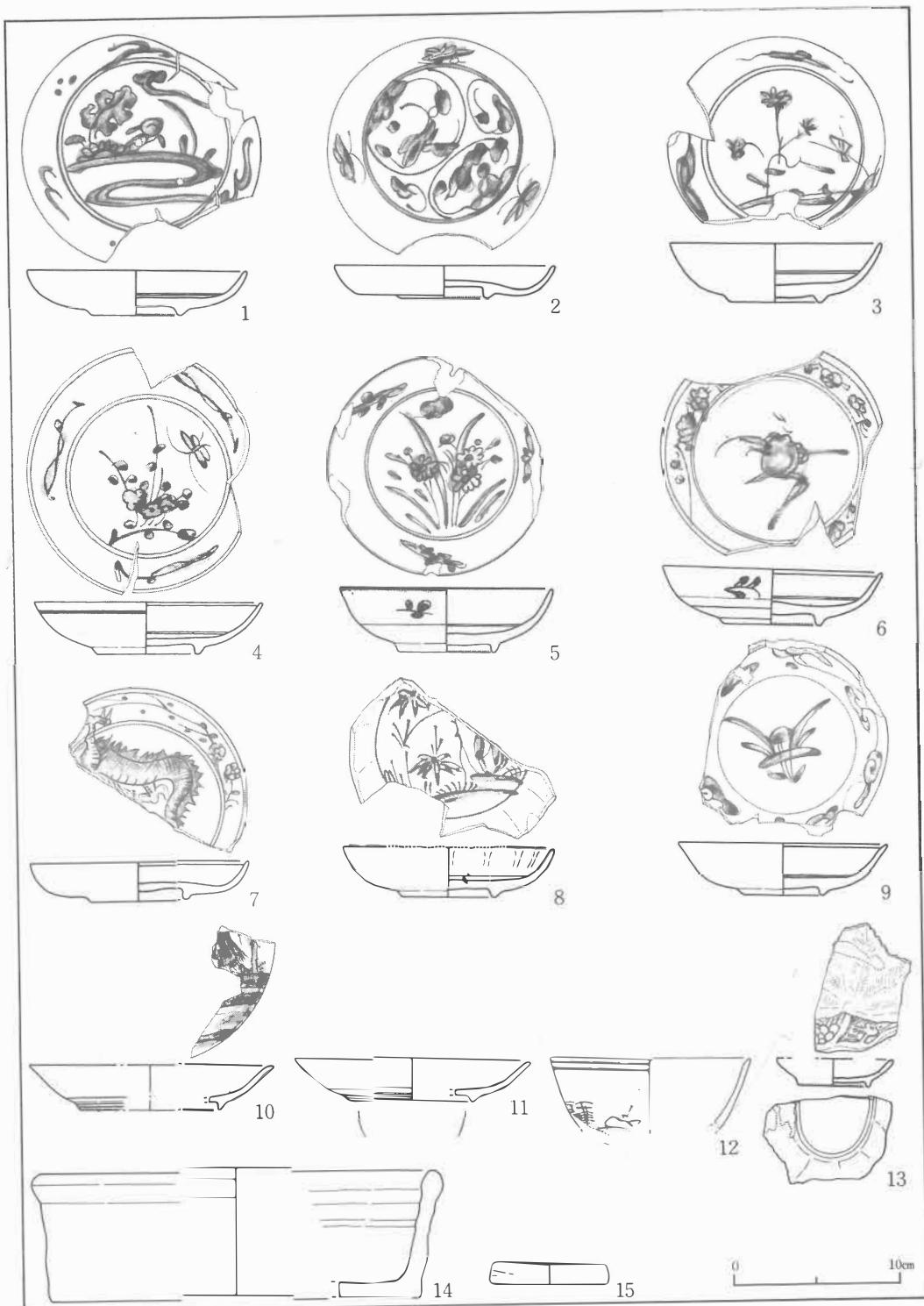


Fig. 8 楠木谷 2号窯 B T II層出土品

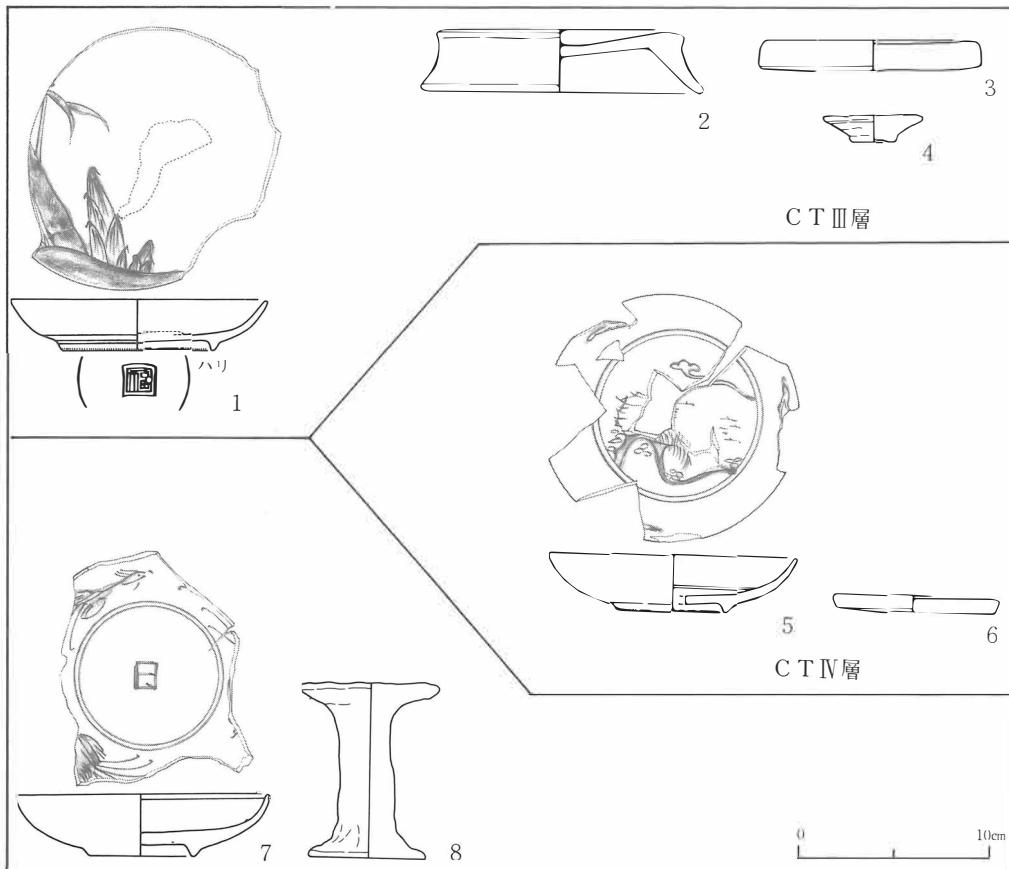


Fig. 9 楠木谷 2号窯B T出土品 7のみ窯跡採集品

に描かれるし、それと共に焼造された網目文碗の中に魚文を描いたものがあるなど、長吉谷窯、猿川窯（有田町）など17世紀後半の窯でしばしば見る文様である。このように長吉谷窯の小皿に共通のものがあったが、この長吉谷窯の小皿は1650年代後半ごろに始まると推測される長吉谷窯の操業年代のうちでも早い時期に位置するものとみている。出土量は極めて少ない。

一方、小皿B群をみると、長吉谷窯の小皿と作行の点で共通性を見出せるし、また柿右衛門B窯（有田町）の皿の中に共通するものが多い。Fig. 3-6の窓絵文小皿は柿右衛門B窯物原出土の小皿（PL. 6-4）と酷似しており、柿右衛門B窯中皿（PL. 6-5）の側面型打陽刻文と同文の小片がB T I層で出土している。また楠木谷窯跡ではこのPL. 6-5に類似の芋葉文を描いた皿（PL. 7-3）が採集されているが、この皿の底裏銘と相似した銘が柿右衛門B窯で出土している。<sup>注2</sup>このPL. 7-3の内面と酷似した皿はイギリスのバーレイ・ハウス・コレクションにみられる。さらに窯跡表面採集のPL. 7-4の右下のような枠文様はPL. 7-5のような長吉谷窯の中皿に多い。PL. 7-4の左は松枝にとまる鳥を描くが、似通った松枝に鳥文は長吉谷窯や柿右衛門窯などにみられる。PL. 8-2のような小皿の鷺文は長吉谷窯の小皿に共通性が認められる。PL. 8-4の型打陽刻文皿の唐草文はこの時期に独特なものであるが、この種の陽刻唐草文は長吉谷窯（PL. 8-5）や柿右衛門窯の小皿

にみられる。PL. 8-4は三好記念館所蔵の色絵丸文瓢形皿と陽刻唐草文だけでなく、車輪状の染付丸文鉢まで類似している。PL. 6-2の左の糸切細工による木葉形小皿と類似のものは天狗谷窯（有田町）などでみられるが、伝世品でこれよりやや精巧な作行のものがイギリスのオリバー・インピー氏所蔵品にみられる。<sup>注4</sup> 以上のように楠木谷窯の皿類は長吉谷窯と柿右衛門B窯との共通性が強く認められる。

碗は染付のみであるが、全形のわかるものはなく、Fig. 8-12のように丸碗と思われるものが少量みられるだけである。これは山水文であるが、他に鳳凰を描いたと思われるものがある。

手塩皿は染付とみられるものが少量得られた。前述のFig. 8-13はいわゆる糸切細工によって木葉形に作り、高台を貼付成形している。長吉谷窯やダンバギリ窯（山内町）出土の糸切細工変形皿に比べると器壁が厚い。

このように物原からは染付がほとんどであるが、ほかに青磁が少量出土している。面取壺があり、窯跡採集品には青磁皿が少量みられる。青磁皿（PL. 5-4の右）は外面透明釉、内面青磁釉、折縁の口縁部には銹を塗っている。この種の内外を掛けた折縁皿は山辺田3号窯、山小屋窯（以上有田町）などで似通ったものがみられ、これらの年代は1640年代前後と推測される。<sup>注5</sup>

#### 〈窯道具〉

##### 2号窯焼成室内

焼成室床面からは白磁中皿と共に工字形トチン1点（Fig. 3-3）が出土した。

##### 2号窯西溝内

西溝内からはサヤが多く出土した。いずれもひも造りの桶胴形サヤである（Fig. 3-5）。

##### 物原

土層の違いによる窯道具の内容の差はとくに認められない。ハマ・トチン・サヤがあり、ハマは円板形のもの（Fig. 8-15、9-3）が主であり、逆台形のもの（Fig. 9-4）が少量ある。陶土製（Fig. 8-15、9-3）が多いが、磁土を用いたものもある（Fig. 9-4、6）。

トチンは工字形であるが、柱部の径に対する円板部の径が大きいもの（Fig. 9-8）と小さいもの（Fig. 3-3）がある。

サヤはほとんどがひも造りによる桶胴形である。（Fig. 8-14、9-2）

## 2. 小溝上窯

小溝上窯の発掘では大量の陶磁片と窯道具が得られた。製品は主に唐津系陶器であり、少量の磁器は染付がほとんどであった。A・BTとCTではいくらか内容が異なるので、この2つの区域を分けて説明する。

#### 〈A・BT〉

##### ● 1号窯内

1号窯を埋立てた土から砂目積の灰釉陶器皿やわずかな量の染付片と窯道具が出土している。灰釉陶器皿はFig. 10-1のような口縁部をN字状に折返したいわゆる溝縁皿が多い。1は全面に施釉し高台部に砂目が4個熔着している。こうした高台内まで施釉した碗・皿類は

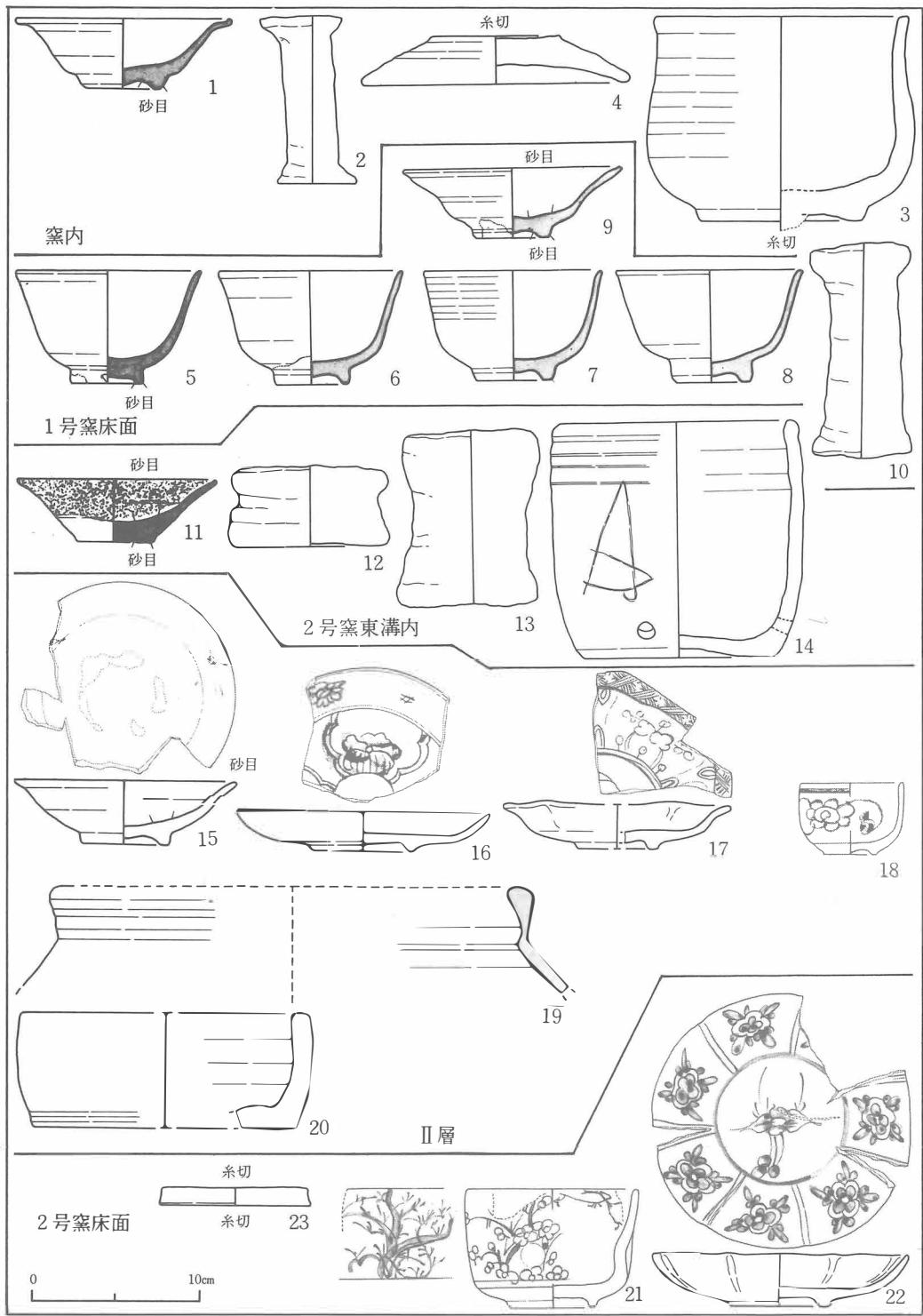


Fig.10 小溝上窯 A T・B T出土品

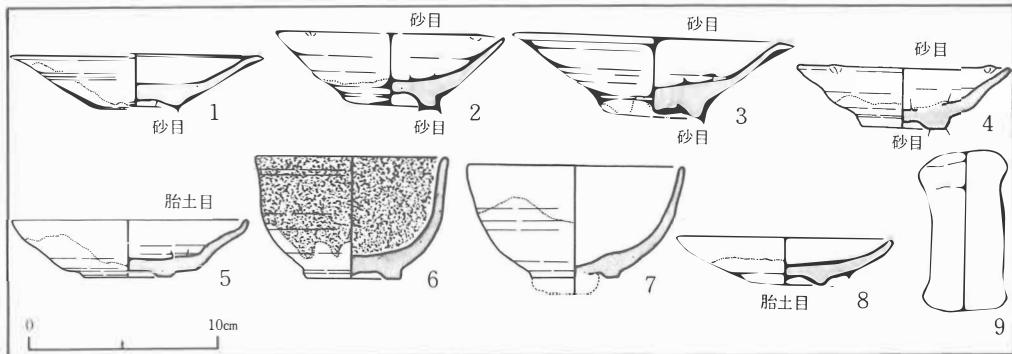


Fig.11 小溝上窯 CT北壁断面より採取されたもの (Fig. 7 参照)

胎土目積段階にはみられないものである。PL. 9—5はFig. 6のイ断面図の⑭の地点から出土した砂目積陶器小皿片である。これは高台部無釉である。

窯道具は工字形のトチン (Fig.10—2) が多いほか、サヤが出土している。

1号窯床面から灰釉陶器碗・皿とトチン1点が出土した (Fig.10)。Fig.10—5～8は灰釉碗。5は高台部に砂目痕が4個あり、7は砂床の砂が熔着しているから床面に直接置かれていたものであろう。8は高台内まで施釉しており、焼成時に7の上に落込んで熔着している。よって8はおそらくトチンの上に据えられていたものと思われる。このように高台部無釉のものと全釉のものが同時に焼造されたことが知られる。Fig.10—9は灰釉陶器溝縁皿であり、内外に砂目痕がみられる。

トチン (Fig.10—10) は工字形であり上面に砂が敷いてある。

#### ● 2号窯東溝内

2号窯の東溝内から鉄釉溝縁皿やトチン、サヤなどが出土している。鉄釉溝縁皿は3点以上出土しているが、Fig.10—11は糸切底である。糸切痕は左巻である。内外に砂目積痕が3個ある。

Fig.10—12は焼台状の道具であり上面に砂が敷かれ磁器の高台の熔着痕がみられる。Fig.10—13は大形のトチン。上面に砂が敷かれている。サヤはロクロ成形のものは少なく、Fig.10—14のようなひも造りのサヤが3個体分出土している。いずれもFig.16—1のようなヘラ描きの星印を施している。Fig.10—14はその星印を描くのに失敗したと思われるものが2個所あり、3個目がFig.16—1である。他の2個体分は各1個所に星印を施す。ひも造りのサヤは17世紀後半に一般的となるが、砂目積の陶器溝縁皿を焼造した窯では確実な出土例を知らない。17世紀後半のひも造り・桶胴形サヤとは形態などいくらか違うようと思われるが、いずれにせよロクロ成形サヤが一般的な17世紀前半の中にあって、小溝上窯でロクロ成形サヤと共に出土したこのひも造りサヤは注目される。なおヘラ描き星印を有するサヤは百間窯<sup>注6</sup>に採集例がある。後述するB T II層出土のFig.10—20もひも造りサヤであるが、星印サヤに比べて厚手であり形態的にもかなり違っている。このタイプの厚手で器高の低いひも造りサヤは百間窯で1点出土している。百間窯とは窯道具だけでなく優れた筒形碗が多いこと、瓶の割合が多いこと、砂目積陶器溝縁皿を焼いていることなどでも共通点があり、両者の関係は今後研究する必要があろう。Fig.10—14も内底に砂を厚く敷いており、底部際に小円孔が一つ開けられている。

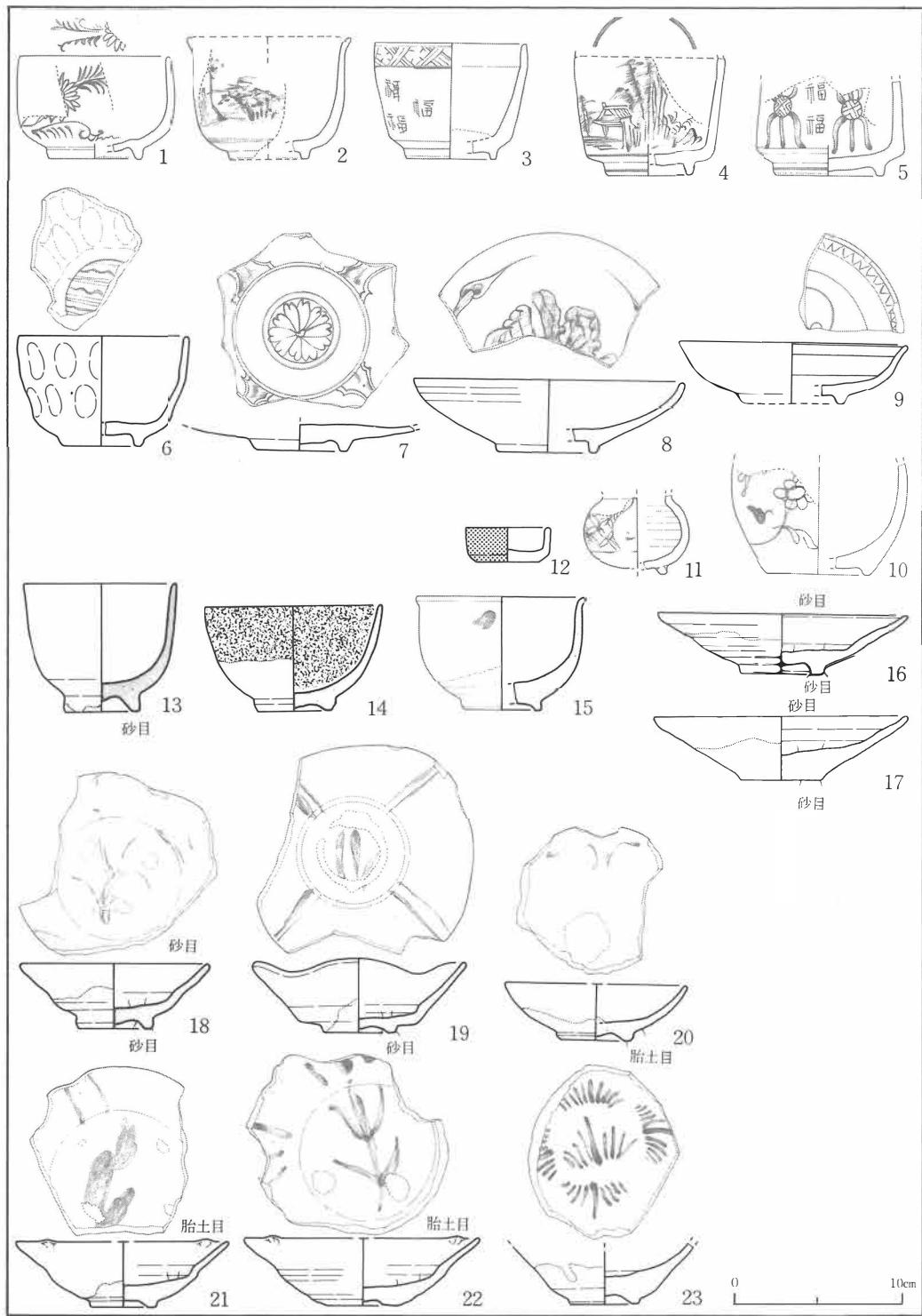


Fig.12 小溝上窯C T II層出土品

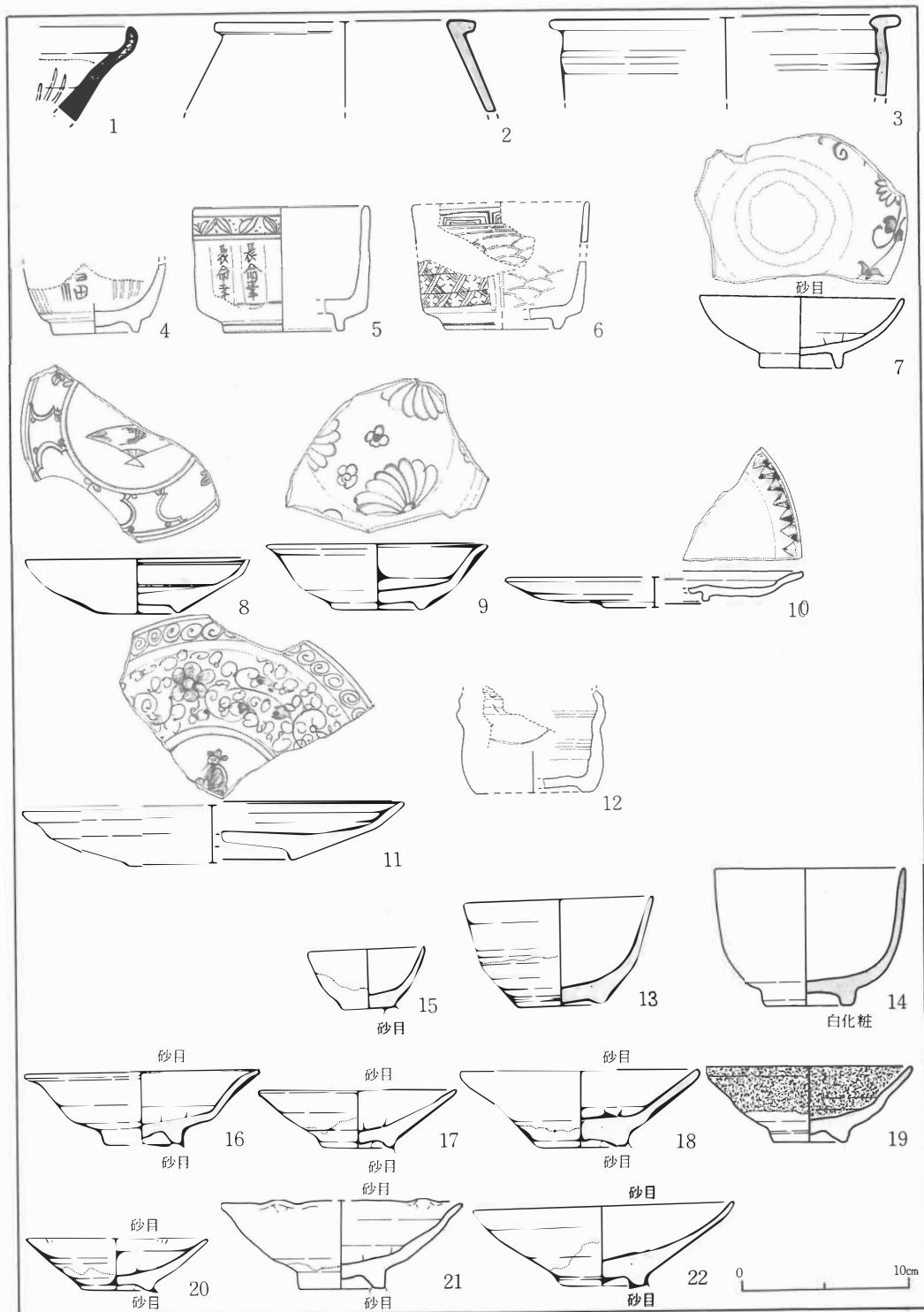


Fig.13 小溝上窯 C T II · III 層出土品

### ● A・BT II層

1・2号窯の上を覆ったII層から多数の陶器と磁器が得られた。Fig.10-15~18、PL. 9~2~4は染付であり、Fig.10-15は見込に4~5個の砂目を置き内側面に蝶文と思われる粗放な文様を描いた小皿。PL. 9-3も砂目積であるがこれは見込を蛇ノ目釉ハギした上に砂目を置いている。Fig.10-16は三方割文を描いた丸形の小皿。17は型打成形で六角形に表した小皿。内側面の文様は梅樹文と思われる。18は菊唐草文の小杯。PL. 9-4は高台畳付部分の幅を広く作っている点が注目される。この種の蛇ノ目高台皿は1640年代を中心に多いからである。これはその早い例とみるかどうかは今後の検討を要する。Fig.10-19は陶器甕の口縁部。内外に薄く施釉しているが溶けていない。A・BTからは甕の胴部片で貼付縁目文のある破片がかなり多くみられた。これらは窯割れしたものがあるからこの窯の製品とみてよい。

Fig.10-20はひも造り成形の厚手のサヤである。内底に砂が敷かれた痕があるから身である。この種のサヤの出土量はわずかであり、主にトチンとハマである。

### ● 2号窯内

2号窯の窯内から出土したサヤはロクロ成形の深鉢形の身 (Fig.10-3) と蓋 (Fig.10-4) がある。両者とも底面に糸切痕を残す。糸切痕は左巻であり、右回転ロクロで成形したものである。身の内底には砂が敷かれ磁器の高台の熔着痕がみられる。

2号窯の床面付近から出土したもので2号窯の廃窯時の製品・窯道具とみられるものである。Fig.10-21は染付碗。いわゆるえくぼ状に胴部の3個所を指で押している。染付文様は梅樹文と不明の樹木を2方に描き、樹木は口縁部を挟んで内面に続けて描いている。この種のえくぼに作る碗は迎原上窯注7 (西有田町) に出土例がある。迎原上窯も砂目積陶器溝縁皿注8 を出土する窯である。Fig.10-22は染付型打小皿。型で側面を七方割とし、花文を染付している。この花文は中国磁器の影響であろうが、類品は天神森5号窯注9 に多い。天神森窯とはPL. 10-8や砂目積陶器溝縁皿など共通点が多い。

Fig.10-23は円板形のハマ。上下の面にロクロ成形時の糸切痕を残す。下面の糸切痕は左巻である。上面に砂が敷かれている。

### 〈CT〉

#### ● 北壁土層断面より採取したもの

比較的新しい遺物包含層とみられる方から説明すると、まずFig.11-1、2は砂目積陶器小皿である。1は外反形、2は折縁形で口端を指押えで輪花状に作る。次の同一層から採取されたものがFig.11-3~5、PL.12-3の陶器小皿である。このうち3、4、PL.12-3は砂目積であるが5は胎土目積である。器形は3とPL.12-3は溝縁皿注8 であり、PL.12-3はそれを焼成時に7枚以上重ねて窯詰めした状態が判る。4は前述の2と同種品。5の胎土目積皿は折縁部分の口端をさらに上方へ曲げたもの。次は東部の層から採取されたものでFig.11-6、7の陶器碗である。6は鉄釉、7は木灰釉 (朽葉色) を施す。6の高台畳付部分にはモミガラ痕がみられ、7の高台部には砂床の砂が熔着している。もっとも古いとみられる層から採取されたのがFig.11-8の陶器皿と9のトチンである。8は高台部に胎土目積痕がみられる丸形の皿。底部を除き、暗緑色の木灰釉を施す。9のトチンは何回か使用されたものとみられるもので、上下の面にモミガラ痕があり陶器の高台の熔着痕が認められる。この胎土目積段階のトチンと思われるものには砂が敷かれたものはみられず、モミガラを敷いた

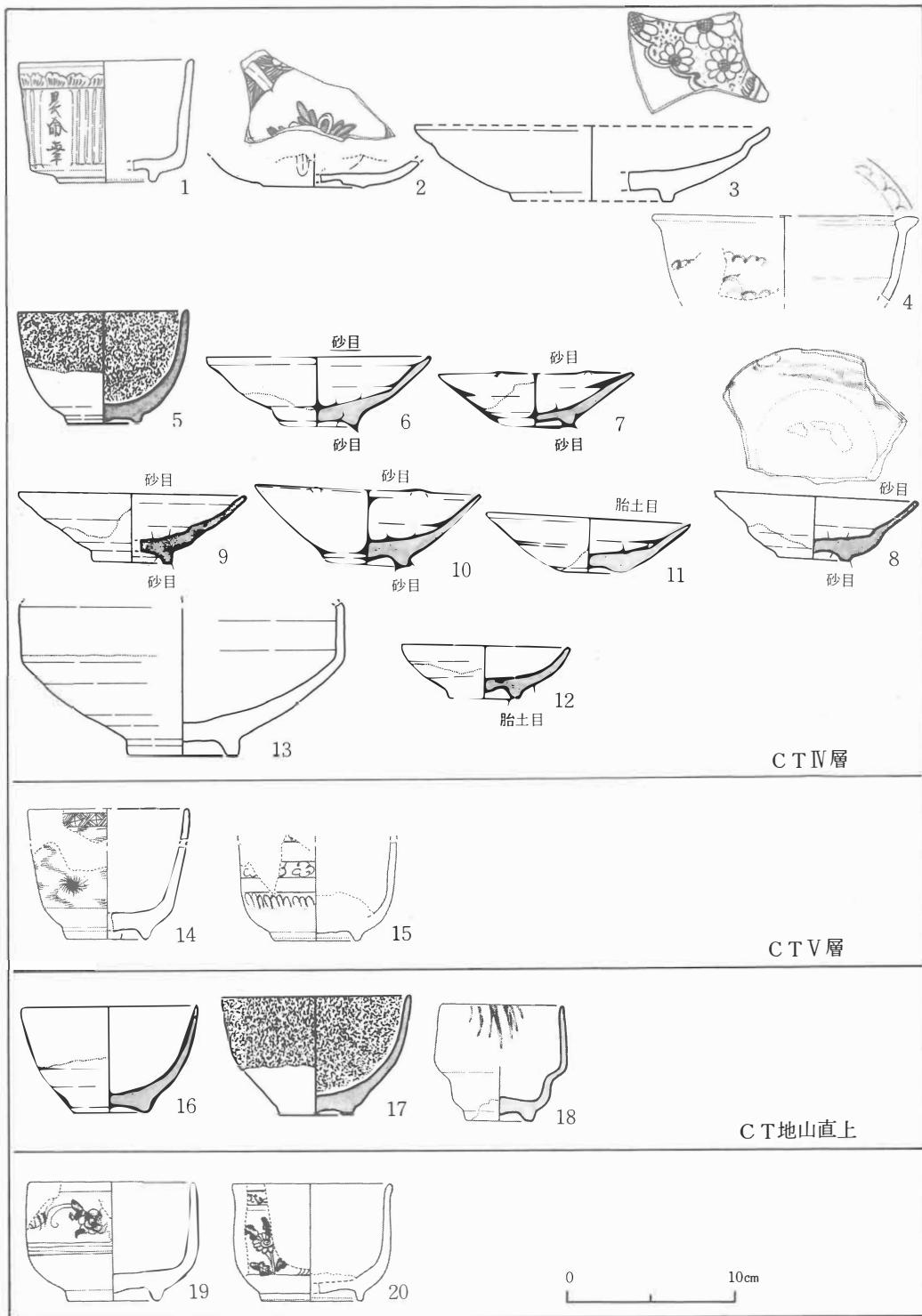


Fig. 14 小溝上窯 CT IV・V層・地山直上出土品

19は①地点張出粘土中  
20は②のピット中より出土

らしい。反対に磁器を焼造した1・2号窯ではモミガラを敷いた痕のある道具や製品はみられなかった。しかし猿川窯（有田町）などの磁器でモミガラ痕のあるものが知られるから、磁器焼造開始と共にモミガラの使用が終ったとみることはできない。

#### ● C T II層

C T各層の種類別出土量の割合は別表に示した通りである。

II層の磁器は染付のほか青磁が1点出土している。染付碗は丸形（Fig.12-1）、端反形（Fig.12-2）、天目形（Fig.12-3、PL.10-6）、筒形（Fig.12-4、5、PL.10-2）のほか型打で側面に菊花形の凹凸文様をつけた碗（Fig.12-6）がある。他に例を知らないが、<sup>注10</sup>中国・明末に天啓5年（1625）銘の類似の型成形平鉢例があるので、それらとの関わりを考えねばなるまい。碗の場合、丸形や端反形よりも天目形や筒形の方が成形・施文の上でより精巧に作られたものが多いことはこの時期の他窯と共に通と言えよう。

染付皿は丸形（Fig.12-8）、端反形（Fig.12-9）などがある。染付瓶はFig.12-10のようないわゆるラッキヨー形になると思われるもののほか、鎬手のいわゆる茶筅形瓶（PL.11-5、6）が多い。また少し形態の異なる瓶で「す入」の文字を染付した瓶（PL.12-2）がある。「す」のほか「しょうゆ」、「いり酒」などの調味料用の瓶は百間窯、天狗谷窯、不動山窯（嬉野町）など17世紀の窯で出土例がある。Fig.12-11は小壺形であり小さな3足が付く。Fig.12-12は口唇部から外側面に青磁釉を掛けた小皿（？）。底部は糸切底であり左巻の糸切痕がみえる。

陶器は碗（Fig.12-13～15）、小皿（Fig.12-16～23）、擂鉢（Fig.13-1）、甕（Fig.13-2、3）がある。碗のうちFig.12-13は砂目積痕があり、小皿のうちFig.12-16～19は砂目積でありFig.12-20～22は胎土目積痕がみられる。17は糸切底であり糸切痕は左巻。擂鉢は外面から内面口縁部にかけて灰釉を施す。Fig.13-2は内面に青海波状の叩き痕がみられ内外に薄く鉄釉（？）を掛けている。

#### ● C T III層

磁器は染付ばかりである。染付碗は丸形、天目形（Fig.13-4）、筒形（Fig.13-5、6）がある。5は胴部にヘラ彫による豎縞を施し、その凹部に「長命幸」の吉祥文字を染付している。他の筒形碗で「長命富貴」の吉祥句を染付したものがあるから、それを編作したものであろう。「長命富貴」は明代中国染付がしばしば用いた吉祥句である。6は胴部を染付四方櫛文の部分とヘラ彫の青海波地文の部分に区画したもの。両者の間の区画線もヘラ彫で豎筋を2条施す。

染付皿は丸形（Fig.13-7、8）、溝縁形（Fig.13-9）、折縁形（Fig.13-10、11）などがある。7は見込を蛇ノ目釉ハギしそこに砂目を置いて重ね積みしている。高台部は全体に施釉されているため畳付の砂の熔着は著しい。9は形態的に陶器の溝縁皿に近いものである。10は折縁口縁部の端を小さく上方に持上げている。12は染付の水指か深鉢のような器形のものである。

陶器は碗（Fig.13-13、14）、小皿（Fig.13-16～22）、小杯（Fig.13-15）、大皿、擂鉢、片口鉢と思われるものなどがある。13は灰釉を施した碗。14は素地に白化粧土を高台畳付部分を除いて雑に塗り、内面は化粧土を搔取った痕がみられ、高台部を除き釉を掛けている。こうした白化粧を施した碗はIII層に集中してみられる。小皿のうち16～18、20～22は砂目積痕がみられ、19は鉄釉を施している。形態は溝縁形（16）、外反形（17）、折縁形（18～21）、丸形（22）がある。

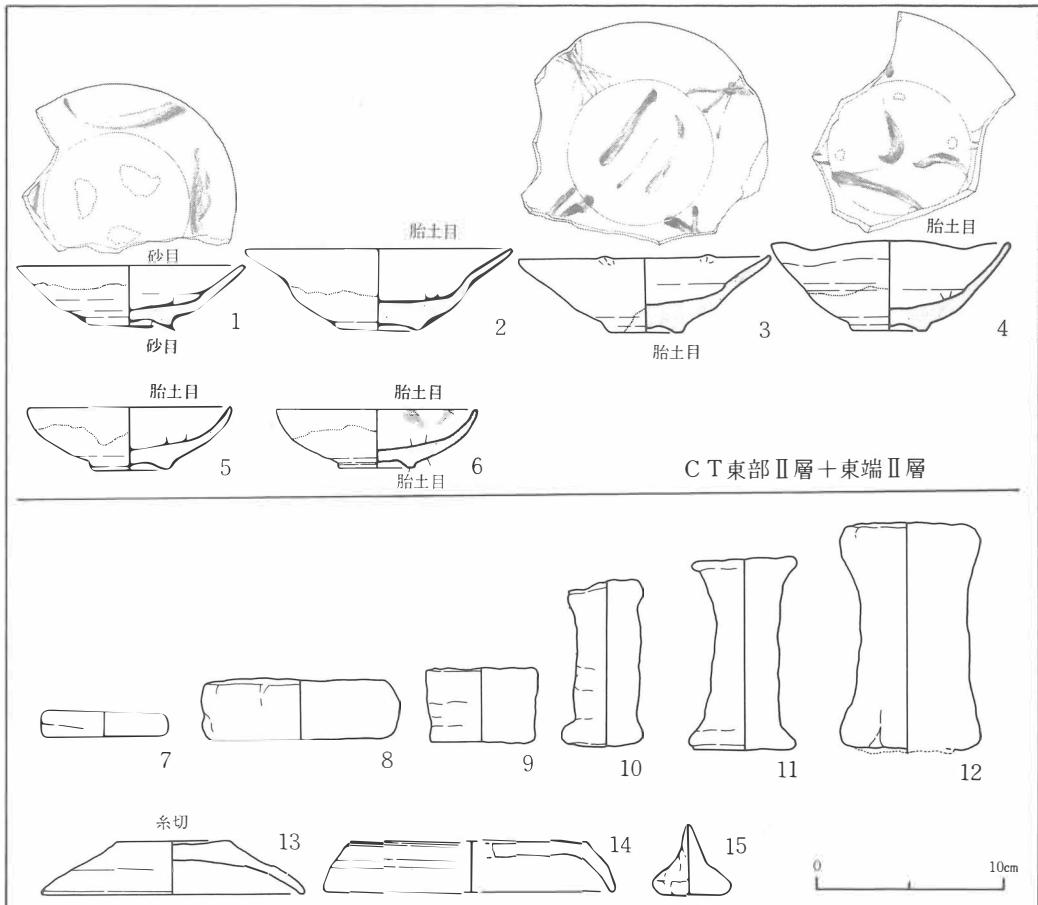


Fig. 15 小溝上窯 C T 出土品 7、8、13、14はII層、9～12はIII層  
15は地山直上

#### ● C T IV層

磁器は染付ばかりである。碗の形態の種類はIII層同様である。Fig.14-1の筒形碗は胴部をヘラ彫の豊筋文で区画し「長命幸」の文字を染付している。皿は丸形、折縁形 (Fig.14-3)などがあるほか、AT II層出土の皿(PL. 9-4)と同型で蛇ノ目高台の小皿がある(Fig.14-2)。Fig.14-4は深鉢のような器形のものである。

陶器は碗 (Fig.14-5)、小皿 (Fig.14-6～12)、大形の火入 (Fig.14-13)、小杯などがある。Fig.14-5は鉄釉を施した碗。小皿は砂目積のもの (Fig.14-6～10) と胎土目積のもの (Fig.14-11、12) がある。11は底部にモミガラ痕が多い。12は朽葉色の木灰釉を施している。器形は溝縁形 (6)、折縁形 (7～11)、丸形 (12)、外反形がある。13は火入と思われるものであり、内面は無釉である。内底部には砂を敷いた痕があるので碗などの小形品を置いて窯詰めしたものとみられる。類品は山辺田4号窯などにみられる。<sup>注11</sup>

#### ● C T V層

磁器は染付のみであり、碗 (Fig.14-14、15)、皿、瓶が少量出土している。陶器は碗、小皿、小杯があり、小皿のうちの胎土目積の割合は2パーセントである。

### ● 地山直上

磁器の割合は3パーセントと少なく、陶器は碗、小皿、小杯、向付、大皿がある。Fig.14-16は灰釉碗、Fig.14-17は鉄釉碗、Fig.14-18は鉄絵の四方形向付。

### ● 東部Ⅱ層+東端Ⅱ層+東部Ⅱ層深部

磁器は2パーセントとわずかにみられる程度であり、陶器は碗、小皿と大皿がある。小皿は胎土目積が77~92パーセントと多く、器形は外反形がなくなり、折縁形(Fig.15-1~4)、丸形(Fig.15-5、6)が主である。5は朽葉色の木灰釉を掛けている。

### ● 窯道具

CT各層の窯道具のうち特徴的なものをここでまとめて説明する。ハマは円板形であり、Fig.15-8は上面に砂が敷かれ磁器の高台の熔着痕がみられる。Fig.15-9は一般的な道具ではないが小形の焼台のようなものである。トチンは大小あり、Fig.15-10~12はいずれも上面に陶器の高台の熔着痕がみられる。また11と12はモミガラ痕が残る。サヤはFig.15-13のようなロクロ成形による糸切底のサヤが一般的であるが、Fig.15-14のようなひも造りの成形のサヤもある。

### 注

- 1 佐賀県立九州陶磁文化館『窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷』1984
- 2 Japan Society 「The Burghley Porcelains」1986, ニューヨークの図36
- 3 三好記念館『三好記念館蔵品図録』1982の図110
- 4 Gemeentelijk Museum Het Princessehof-Leeuwarden 「mededelingenblad nederlandse vereniging van vrienden van de ceramiek」1981、オランダのNo.137
- 5 有田町教育委員会『佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査(遺物篇)』1986の第18図129
- 6 佐賀県立九州陶磁文化館『百間窯・樋口窯』1985のFig.11の13
- 7 西有田町教育委員会『迎の原古窯跡』1977
- 8 堺市教育委員会『堺市文化財調査報告第20集』1984の第300図3などの中国青花大皿の口縁部にみられる
- 9 佐賀県立九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』1984のP.162
- 10 河原正彦『古染付・鑑賞編』京都書院、1977の図77、78
- 11 有田町教育委員会『佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査(遺物篇)』1986の第5図6

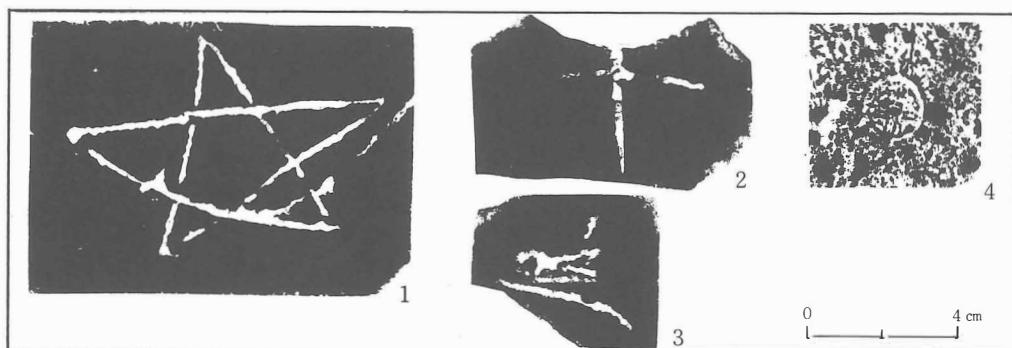


Fig.16 小溝上窯のサヤの銘款拓本 1はひも造り成形、2~4はロクロ成形  
1~3は身、4は蓋

表 小溝上窯 C T 土層別出土量

器種	種類	特徴	目積類	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	地直	山上	東部Ⅱ層	東端Ⅱ層	東部Ⅲ層深部	東部地山直上	合計
碗	灰釉			416	217	70	9	42	61	76	17	8	916	
	木灰釉			30	23	1					19	1	5	79
	鉄釉			107	41	8			16	17	40	5	5	239
	灰釉	高台内施釉		45 (0.07)	11 (0.04)	10 (0.11)	5 (0.33)	1砂目 (0.02)	1 (0.01)					73
	鉄釉			1										1
		胎土目		1	1									2
		砂目		7			1							8
		白化粧			9									9
碗小計				607 (0.34)	302 (0.31)	89 (0.38)	15 (0.17)	59 (0.60)	79 (0.71)	135 (0.73)	23 (0.64)	18 (0.69)		1327
皿	灰釉	鉄絵	砂目	173	94	6	4	9	3	2	1	※口		292
	鉄絵	折縁	砂目	179	114	17	9	3	1					323
	外反	鉄絵	砂目	141	111	8	3	13						276
	鉄絵	溝縁	砂目	32	37	7	1	2		1				80
	鉄絵		砂目	466	220	61	40		3	6				796
	鉄絵	高台内施釉	砂目	50	26	12	6	1						95
	鉄絵	糸切底	砂目	3										3
	鉄絵	胎土目	砂目	75 (0.07)	24 (0.04)	3 (0.02)	1 (0.02)	6 (0.18)	23 (0.77)	40 (0.82)	12 (0.92)	8 (1.0)		192
皿小計						1						※ハ		1
小杯	灰釉		砂目	8	12	9	2	1				※口		32
向付	鉄絵			3	1			1						5
大皿	鉄絵				1				1	1				3
火入	鉄絵			1		1								2
擂鉢				(1)	1									1
甕				(3)										0
片口か			砂目		2									2
陶器合計				1738	946	213	81	96	110	184	36	26		3430
碗	染付			17	12	9	4		1					43
小皿	鉄絵			20	17	10	2	2						51
特殊小皿	青磁			1										1
小皿	染付		砂目	5	2					1				8
小杯	鉄絵				1									1
瓶	鉄絵			11	11	3	2	1	1					29
鉢	鉄絵			2										2
磁器合計				56 (0.03)	43 (0.04)	22 (0.09)	8 (0.09)	3 (0.03)	2 (0.02)	1 (0.01)	※ニ 0	0	135 (0.038)	
合計				1794	989	235	89	99	112	185	36	26	3565 (3569)	

注. 出土数は接合後の底部の個数で表示している。ただし陶器擂鉢と甕は口縁部の個数を( )内に示した。

しかし、この個数は合計数には含めていない。また数値の下の( )内は、※イは各層の陶器碗中に占める割合、※口は各層の陶器中に占める割合、※ハは各層の陶器皿中に占める割合、※ニは各層全体量に占める割合を示す。

# ま　　と　　め

## 1. 楠木谷窯

2号窯は調査の結果、南から北へと上る階段状連房式登窯であり、ATで発見された焼成室は窯の上部に当ると推測される。AT部分の焼成室規模は調査範囲の観察からは奥行が2.8～3m位になると推測される。この程度の焼成室奥行規模をもつのは肥前の窯の変遷の中では山辺田1・2号窯、天狗谷E・A窯などであり、筆者が焼成室平均規模の変遷から第3グループとした中に入る。窯上部ではあるが、山を大きく削平して窯の木口と反対側に人工の土壁を設けている点もこのグループの窯から現れる。この第3グループの窯群の年代は1630年代から1660年代の間と推測している。次に窯道具の方からみると、第3グループのうちでも新しい時期に位置づけられるダンバギリ窯の窯道具の組合せにもっとも近いと言える。すなわちハマは逆台形のものが現れ、しかも陶製に加えて磁土を用いたものが加わる。サヤはロクロ成形による糸切底の深鉢形のものに代ってひも造りの桶胴形サヤが主体となる。そしてこの平底サヤの底部をトチンで支え、砂床から離して火回りの良い部分にサヤの位置を上げることも行われるし、サヤを2個以上重ねる窯詰法もみられる。これらの窯詰法もダンバギリ窯から第4グループの長吉谷窯などで盛行するものである。

ダンバギリ窯との共通点は製品の面にも認められる。つまり糸切細工によって貼付の変形高台皿が現れること、製品の器壁は薄いものが現れるがそれが全てではないことなどである。

2号窯物原Ⅲ層からは器壁の厚い小皿（A群）と共に器壁が薄くハリ支えを用いた小皿（B群）が出土しており、西溝底からも両者が出土しているからこの2号窯で小皿A群とB群の両タイプを焼造していたことは明らかであろう。そして2号窯焼成床面に残された多数の白磁中皿は器壁は比較的薄いにもかかわらず、高台径は比較的小さくハリ支えは行なっていない。高台の成形はB群ほど薄くシャープではないことも注意される。こうした形態の白磁皿は山辺田4号窯周辺出土の白磁皿（報告で1・2号窯と同じ第Ⅳグループとしたもの、報文第21図175）にみられるが、その成形の細部や材質は違ってみえる。

楠木谷窯の製品を2号窯出土品と窯跡採集品を合せてみると、前述のように長吉谷窯や柿右衛門B窯の比較的早い時期とみられる製品と共に点が多い。長吉谷窯は1650年代後半に始まり1680年代ごろまで操業したとみられるし、柿右衛門B窯は1660年代から90年代前半までの間に位置づけられる。それらとの比較から楠木谷窯の操業年代の下限は1660年代ごろと推測される。

楠木谷窯は中・小皿を中心に高級品を焼造した窯の一つとみられ、その点では柿右衛門B窯と共に通している。PL. 5-5の型打角皿の小片は口縁部内面に雷文帯をめぐらし、口端に鉄を塗っている点で『日本の陶磁11・古九谷』のNo.186の色絵竹虎文角皿に似通っているし、外側面の唐草文は東京国立博物館所蔵の古九谷色絵蝶牡丹文皿の外側面の染付唐花唐草文に似ている。また前述のPL. 7-3の底裏銘とほぼ同じとみてよい伝世品があり、それは染付で松に鶴文を描きその上から赤と緑で上絵付を施した中皿である。また前述のPL. 8-4にみた染付の車輪状の丸文は古九谷にもしばしばみられる文様である。以上のようにみてくると楠木谷窯は古九谷様式とも関わりのある窯とみてよからう。白磁中皿やBTⅡ層出土のFig. 8-11、PL. 8-4、6、PL. 7-1のように色絵素地もしくは色絵素地となりうる白

磁皿が出土していることから色絵が焼かれている時期の窯であることは疑いないとところである。

先にみたように楠木谷窯は当時「年木山」と呼ばれた窯場のうちであり、この年木山は寛永14年（1637）の窯場の統合時にその名がみえ、その後、明暦元年（1655）までは記録上、窯場の存在が明らかであつたが、それ以降は貞享5年（1688）の1例のみで姿を消す。この1688年の例も「年木山壺右衛門内」とあるように、壺右衛門の妻であるから、この時期にも年木山が窯場として操業していたという証拠にはなり難いように思われる。かえって楠木谷窯の遺物から操業年代を考えると、1660年代以前と推測されるので、1655年まで過去帳に住人の死亡記載が多いのとは矛盾しない。1660年代は下限年代であるが、この60年代まで操業年代が降る確証はない。あるいは過去帳記載の1655年よりそれほど遅れることのない1650年代後半のうちに廃窯を迎えた可能性も考慮しなければならない。とすれば年木山が廃窯となり、陶工の全部もしくは一部が移動して柿右衛門B窯が築かれたこともありうるのである。製品の器種構成、皿の成形、意匠の類似などがそれを示唆している。しかし柿右衛門B窯ではサヤの所有者印が比較的多いのであるが、楠木谷窯のサヤには確実な所有者印はみられなかった。この違いは年代差によるものかもしれない。両窯の関係については今後さらに考究を進めねばならない。

## 2. 小溝上窯

小溝上窯は調査の結果、1・2号窯が発見された。1号窯が古く、続いて2号窯が築かれたものと推測される。1号窯は焼成室床面に残された陶器から砂目積段階の窯であり、その整地土からは染付碗などが少量出土しているので、陶器と共に磁器も焼造していたものとみられる。次の2号窯は床面から染付碗と皿が出土しており、染付磁器を焼造した窯であることが明らかであるが、その西側や東側の溝内から陶器が出土しており、2号窯もまた陶器と磁器を焼造した窯と思われる。そして、これらの陶器で目積のあるものはすべて砂目積であり、胎土目積はみられなかった。よって1・2号窯は砂目積段階の窯と推測される。砂目積陶器は秀吉の朝鮮出兵の際に連帰られた陶工集団がもたらしたものと推測しており、慶長年間のうちに胎土目積から砂目積へと漸移するとみられるので、1・2号窯のように胎土目積陶器がみられないことは、この2窯が慶長でも遅い時期かあるいは元和以降とみられよう。そして1号窯の床面出土の砂目積陶器皿はいわゆる溝縁皿であったが、この砂目積陶器溝縁皿は寛永14年（1637）の伊万里・有田地方の窯場の整理・統合事件を境に姿を消すとみられるから1・2号窯の下限も1637年ごろと推測される。

1・2号窯周辺では砂目積陶器溝縁皿が多かったが、物原のCTⅡ層やⅢ層の陶器では折縁形、外反形が多い。V層までは胎土目積陶器は少ないが、地山直上になると胎土目積の割合が多くなり、東部Ⅱ層以下は胎土目積陶器の割合が7割以上となる。東部の地山直上では砂目積陶器はみられず、すべて胎土目積陶器であった。東部Ⅱ層以下の碗や皿では朽葉色の木灰釉の割合が多くなる。1・2号窯周辺ではこの木灰釉の製品はみられないから、砂目積段階になると木灰釉は使用されなくなると推測される。このように物原のもっとも古いと思われる土層では胎土目積陶器であったことから、1・2号窯より古い胎土目積陶器を焼いた窯が別にあるとみられる。

CTでは砂目積の鉄絵陶器がかなり多量に出土している。こうした砂目積鉄絵陶器は山辺田4号窯で出土している。山辺田4号窯も胎土目積から砂目積陶器に移行した窯とみられる

が、砂目積陶器溝縁皿や磁器を多数焼造する段階の前で終った窯と推測されるから、1・2号窯よりは古い窯と考えられる。

磁器は染付がほとんどであり、青磁がわずかにみられた。表採品には辰砂の碗が1点ある。染付には砂目積の磁器があり、その中に見込を蛇ノ目釉ハギしたものがある点は天神森窯などの砂目積磁器皿と同様である。小溝上窯の磁器の特色は筒形碗に優れたものが多いことと鎬手の茶筅形瓶が目立つことであろう。筒形碗に優品が多いことはこの時期の窯に共通している点である。この筒形碗の量・質ともにもっとも高いのは百間窯であるが、猿川窯、天神森窯などでも優れたものが多い。小溝上窯では多種類の筒形碗がみられ、「長命富貴」、「長命幸」の文字を染付したものなどは他窯には現在のところ例をみないものである。2号窯床面から出土したFig.10-22は小溝上窯の廃窯時の染付皿とみられるが、これと類似のものは天神森窯でもっとも新しいとみられる5号窯で多数出土していることからも天神森窯と小溝上窯の廃窯は近い年代と推測される。

以上のように小溝上窯は胎土目積陶器の段階（1580年～1609年と推測している）に始まり、17世紀に入ると砂目積陶器と磁器を焼造し、寛永14年（1637）の窯場の整理・統合事件で廃窯になったものと推測される。しかし、出土品のなかにはひも造りのサヤや、蛇ノ目高台の染付皿など、砂目積陶器溝縁皿を焼造した窯では今までみられなかったものが少量ながら得られたことが注意される。また磁器の中でも瓶類の割合が比較的多いことは天狗谷窯や百間窯などと共通しており、これらの窯との関わりを今後考究しなければならない。とくに記録上、有田の窯業の黎明期に名を残す金ヶ江三兵衛や家永壹岐守らとのつながりも推測される小溝山の一つであるので、今後この窯跡の保存活用を推進することが望まれるのである。

## 注

- 1 大橋康二「肥前古窯の変遷」佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第1号、1986
- 2 有田町教育委員会『佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査（遺物篇）』1986
- 3 中央公論社『日本の陶磁11・古九谷』1975
- 4 小学館『世界陶磁全集9・江戸（四）』1983のNo.86
- 5 今泉元佑『初期有田と古九谷』1974の図60や創樹社美術出版『小さな蕾・伊万里・鍋島』1984のP.103

# PLATES



1



2



3

1. 楠木谷窯 (北から)
2. 楠木谷 2号窯焼成室と  
溝 (A T) (南西から)
3. 楠木谷 2号窯焼成室  
(南から)



1



2



3

1. 楠木谷2号窯焼成室白磁皿出土状況(南東から)
2. 楠木谷2号窯物原(B.T)  
(南から)
3. 小溝上窯(西から)



1

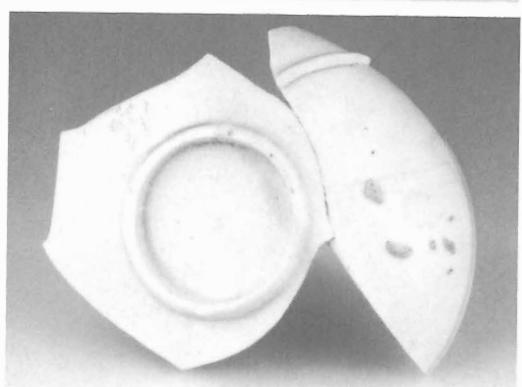
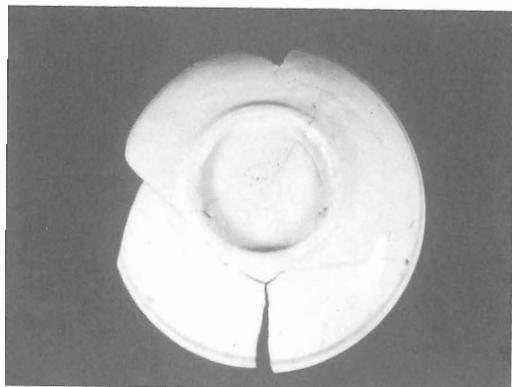
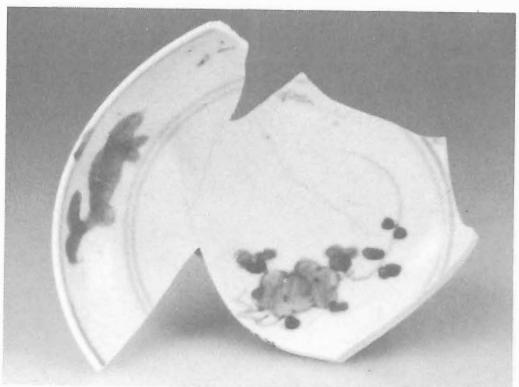
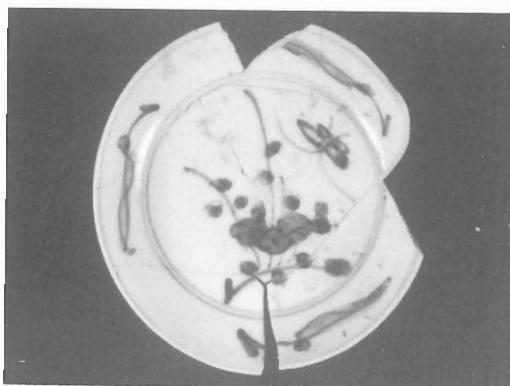


2



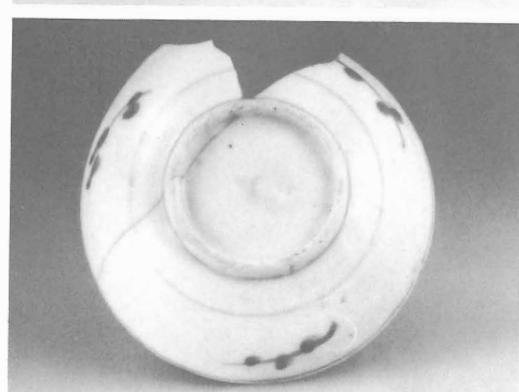
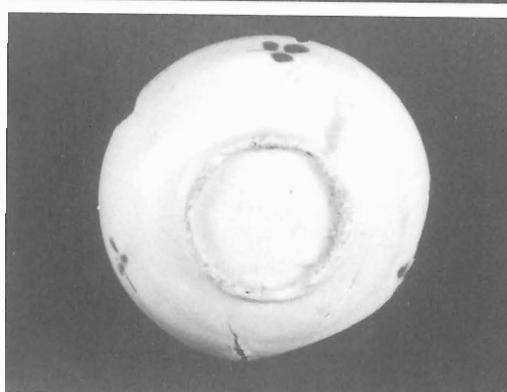
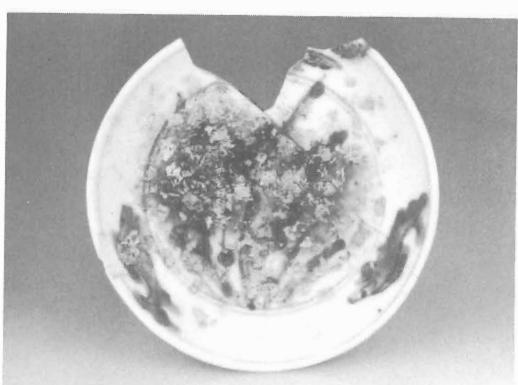
3

1. 小溝上 1 号・2 号窯焼成室 (A・B T)(西から)
2. 小溝上 1 号窯焼成室陶器出土状況 (西から)
3. 小溝上 窯物原 (C T)  
(西北から)



1. 染付折枝梅文皿 (楠木谷窯B T II層出土)

2. 染付折枝梅文皿 (長吉谷窯出土)

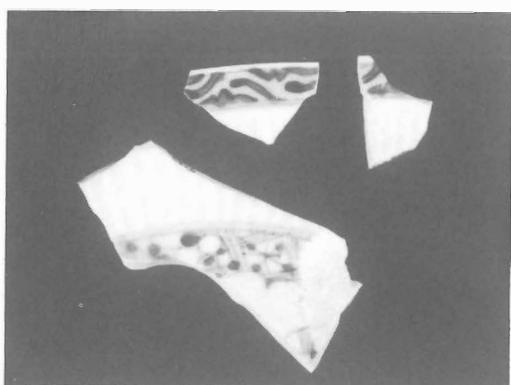


3. 染付草花文皿 (楠木谷窯B T II層出土)

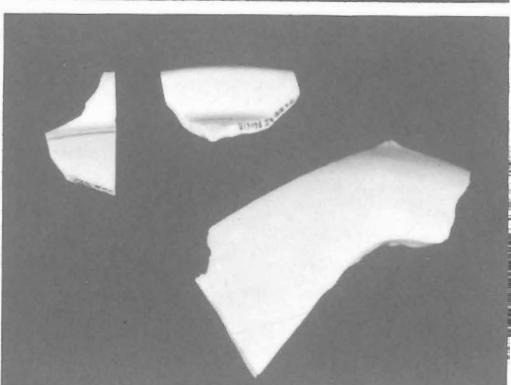
4. 染付草花文皿 (長吉谷窯出土)



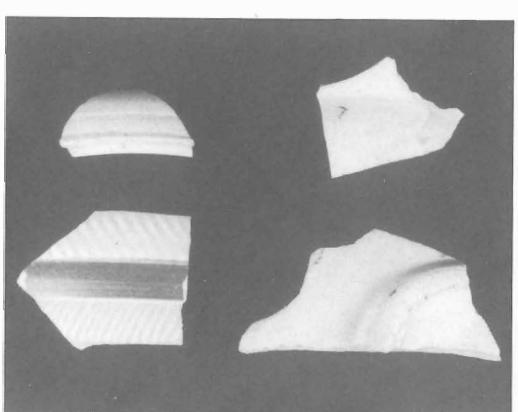
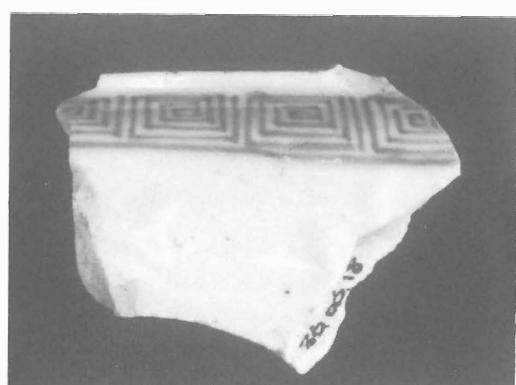
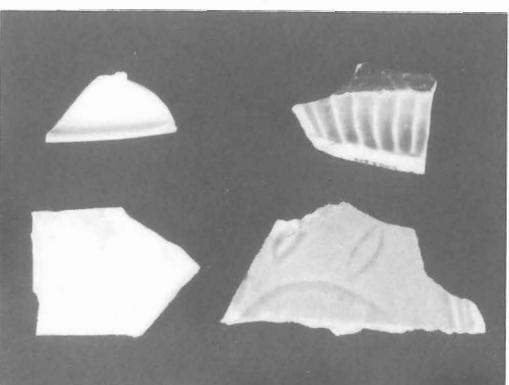
1. 染付四方割花卉文皿 (楠木谷窯表採)



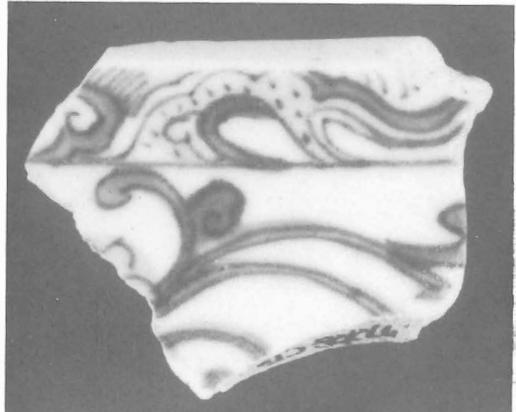
2. 染付鹿文皿 (同上)



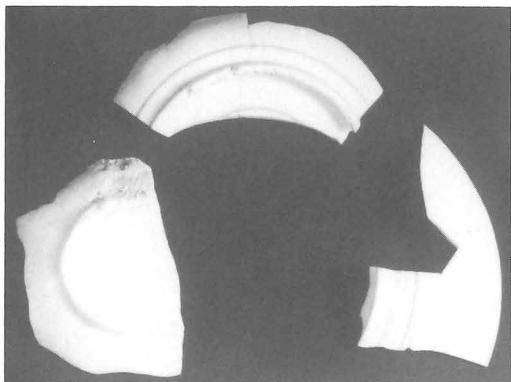
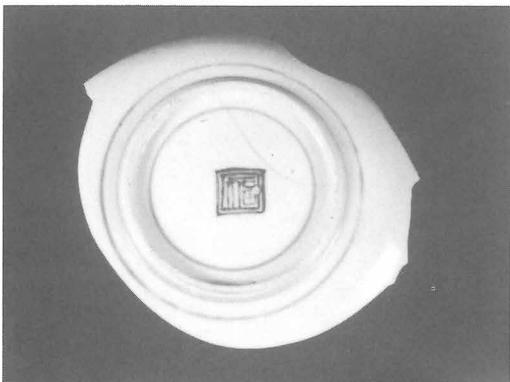
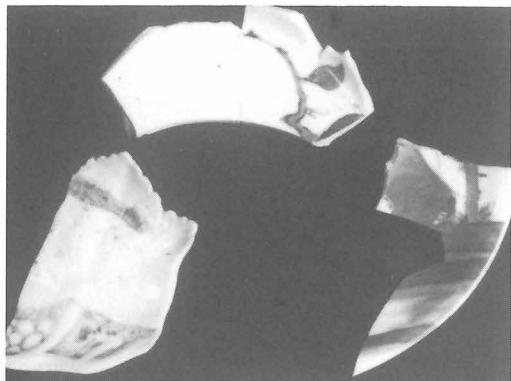
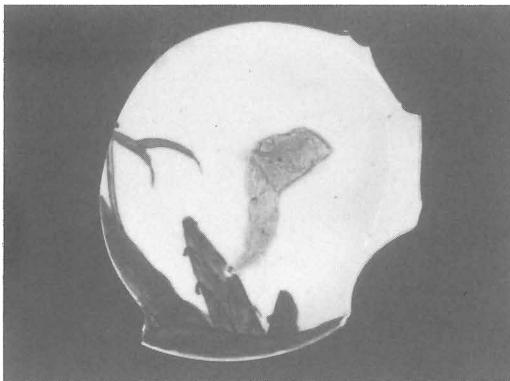
3. 染付鎬手四方櫻地文皿 (楠木谷窯表採)



4. 青磁壺(左)と皿(右)(同上)

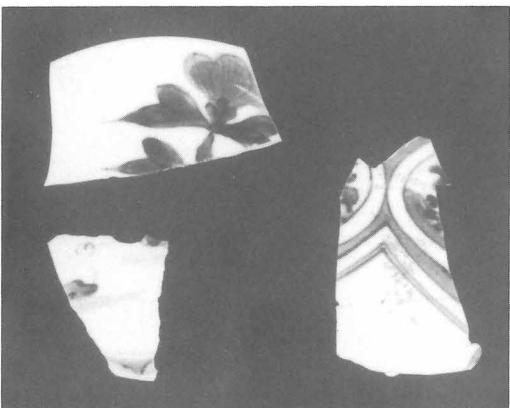


5. 染付型打角皿 (同上)

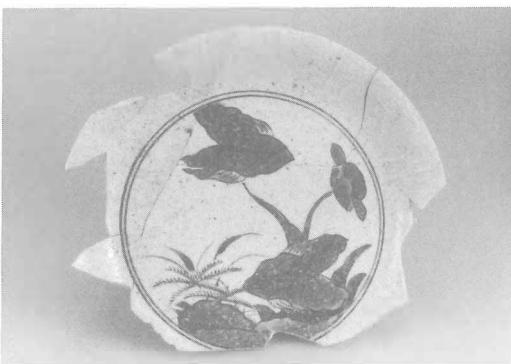
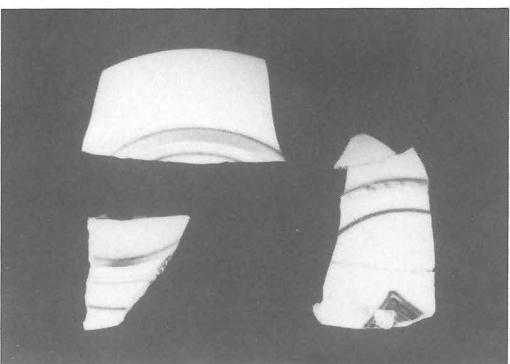


1. 染付筍文皿 (楠木谷窯B TⅢ層出土)

2. 染付皿 (楠木谷窯B TⅡ層出土)



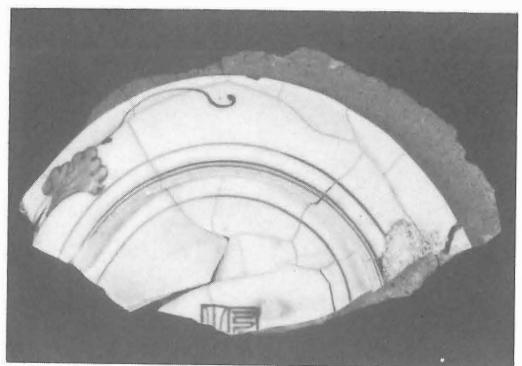
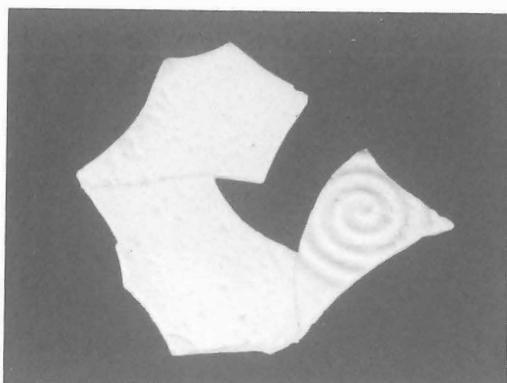
4. 染付窓絵花卉文皿 (柿右衛門B窯物原出土)



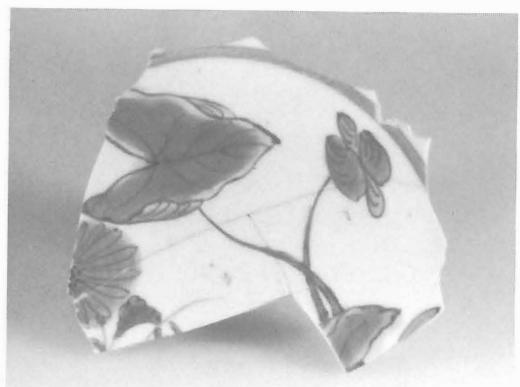
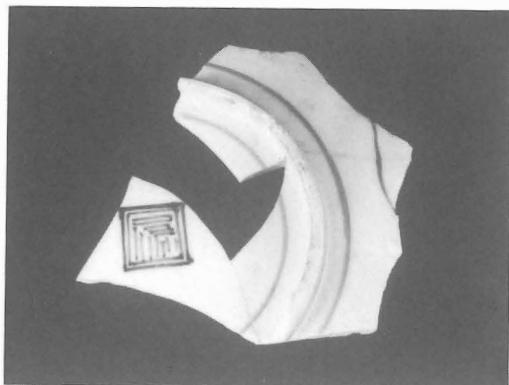
3. 染付皿

(同上A T出土、左2点は溝内、右はⅡ層)

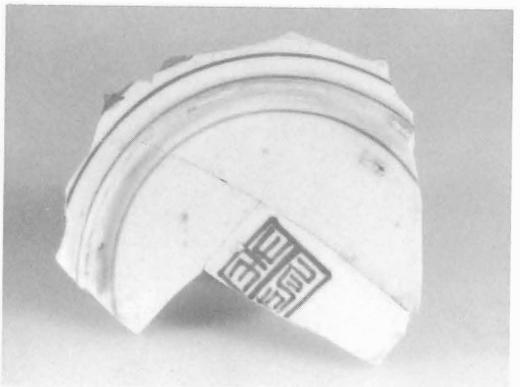
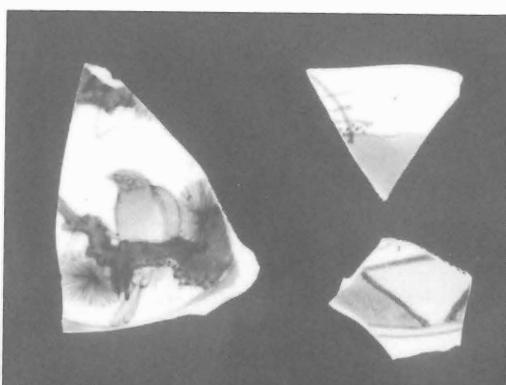
5. 染付芋葉文皿 (柿右衛門B窯物原出土)



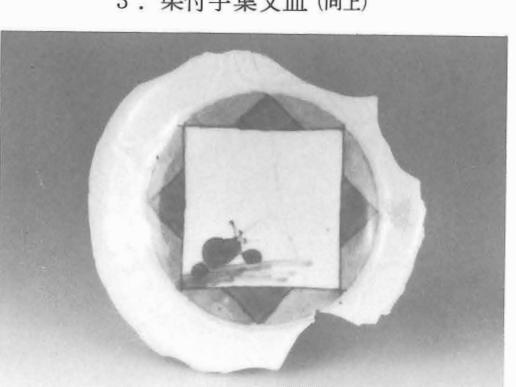
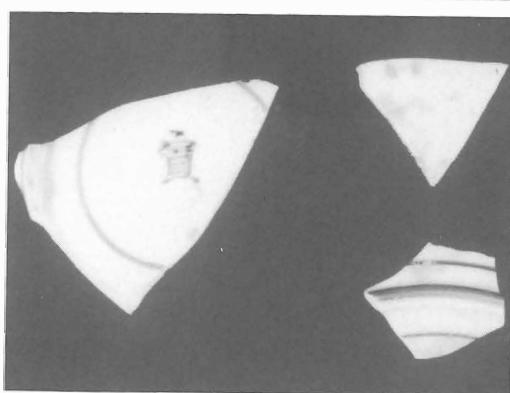
2. 染付型打文皿(サヤ熔着)(楠木谷窯表探)



1. 染付型打屈輪文皿(楠木谷窯表探)

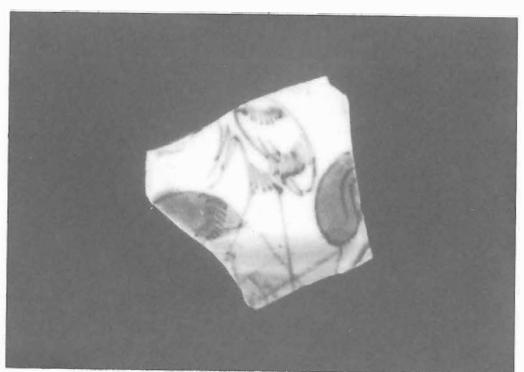
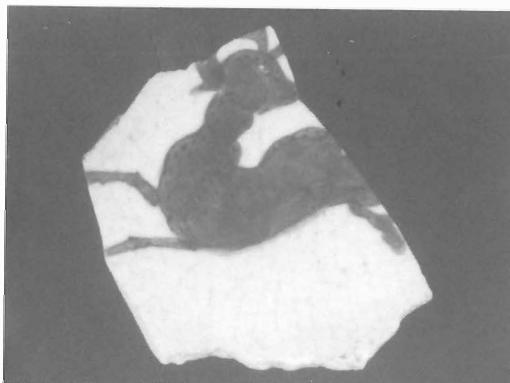


3. 染付芋葉文皿(同上)

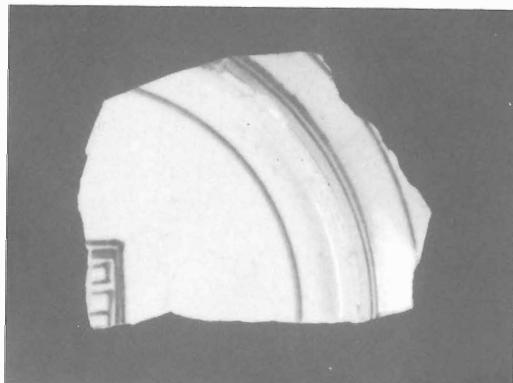


4. 染付皿(同上)

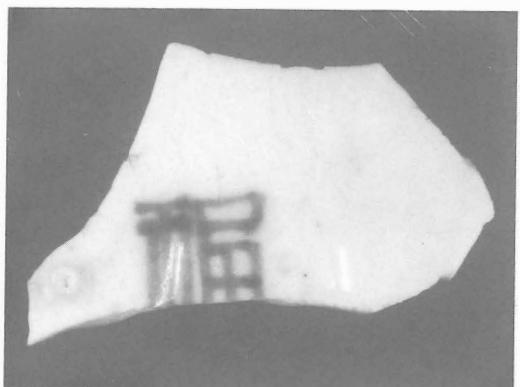
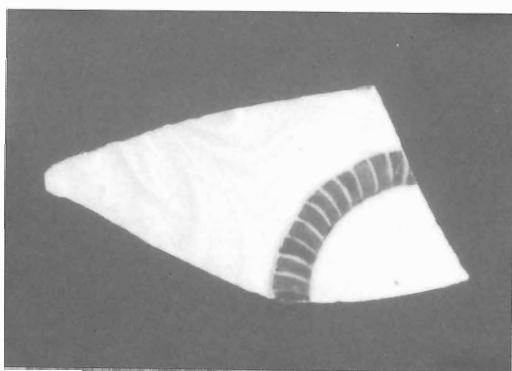
5. 染付色紙文型打皿(長吉谷窯出土)



2. 染付鷺文皿 (楠木谷窯B T出土)

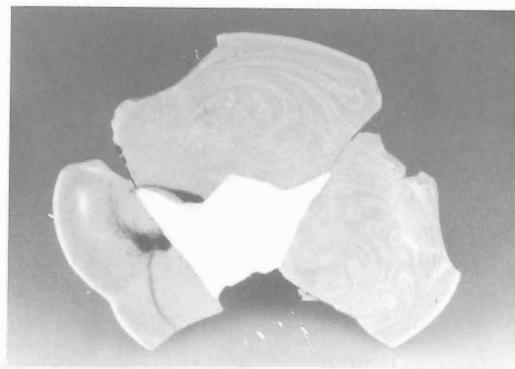


1. 染付鹿文皿 (楠木谷窯表採)

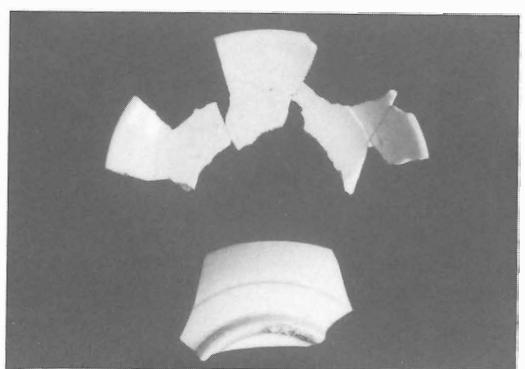


4. 染付型打皿 (楠木谷窯表採)

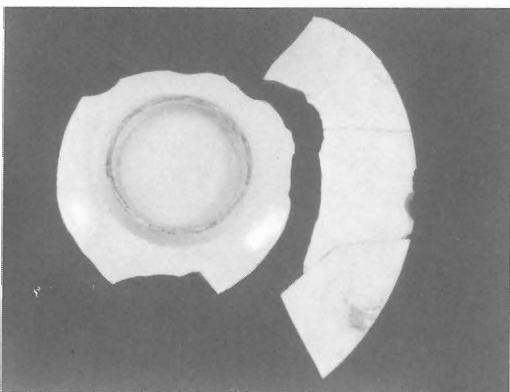
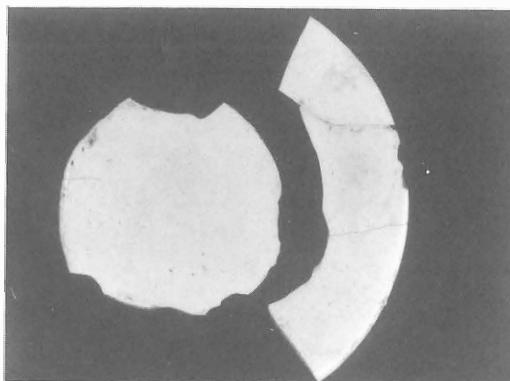
3. 染付皿 (楠木谷窯表採)



5. 染付型打皿 (長吉谷窯出土)



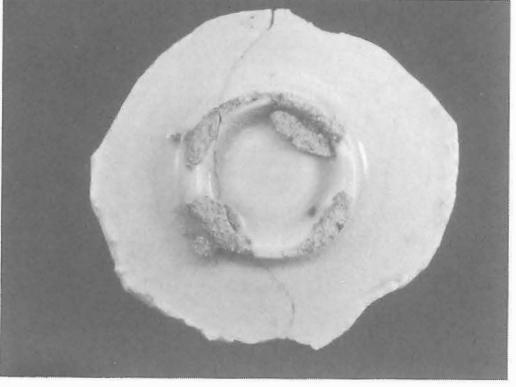
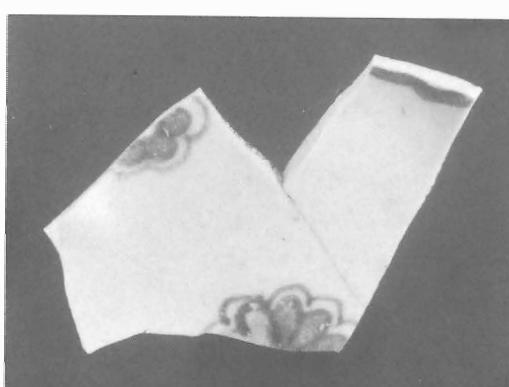
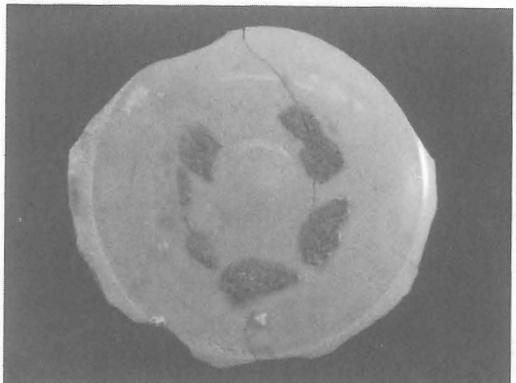
6. 染付皿 (色絵素地) (楠木谷窯B T II層出土)



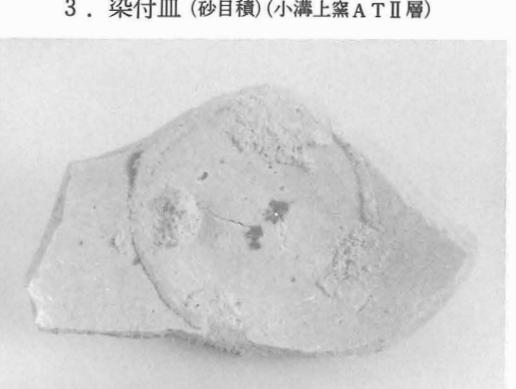
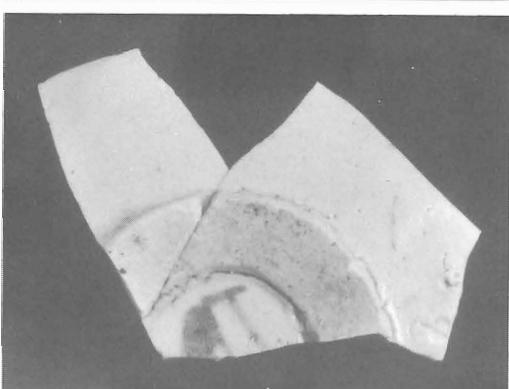
1. 白磁皿 (楠木谷窯 A T 焼成室床面出土)



2. 染付唐草文碗 (小溝上窯 B T II 層出土)

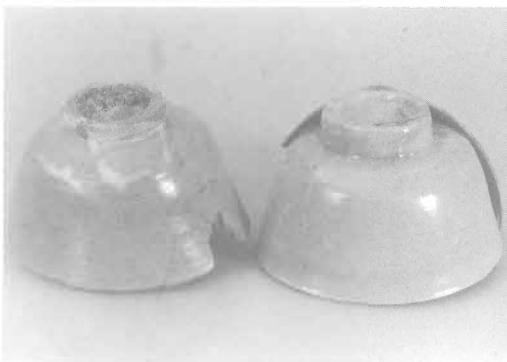


3. 染付皿 (砂目積) (小溝上窯 A T II 層)



4. 染付花散文型打皿 (小溝上窯 A T II 層出土)

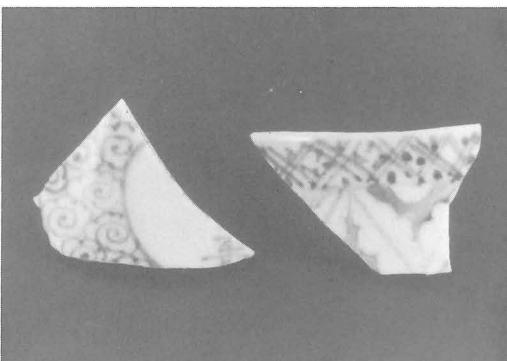
5. 陶器皿 (砂目積) (小溝上 1 号窯内 2 層出土)



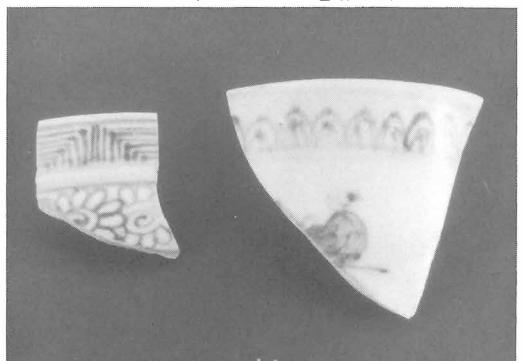
1. 陶器碗 (2点は熔着)  
(小溝上1号窯床面出土)



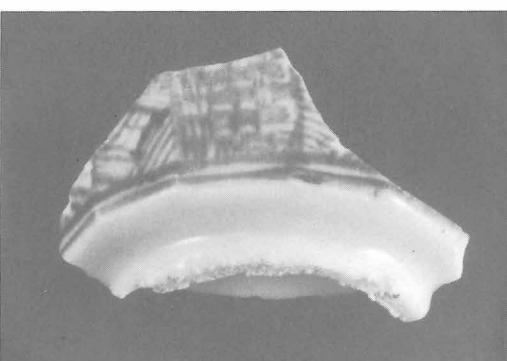
2. 染付窓絵山水文碗  
(小溝上窯CTⅡ層出土)



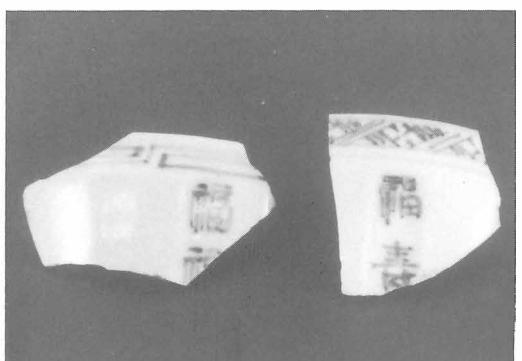
3. 染付碗 (小溝上窯CTⅢ層出土)



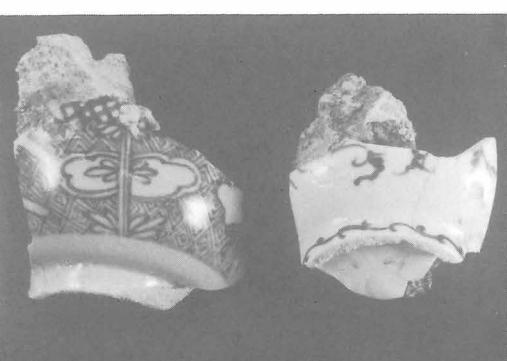
4. 染付碗 (同上CTⅢ層出土)



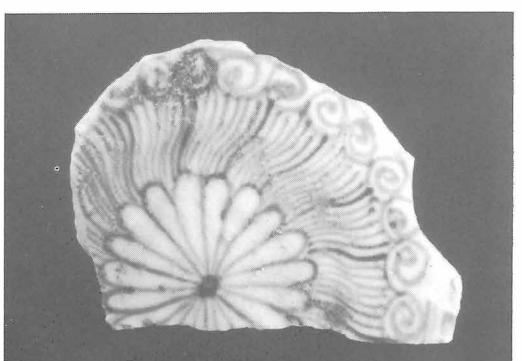
5. 染付面取碗 (同上CTⅣ層出土)



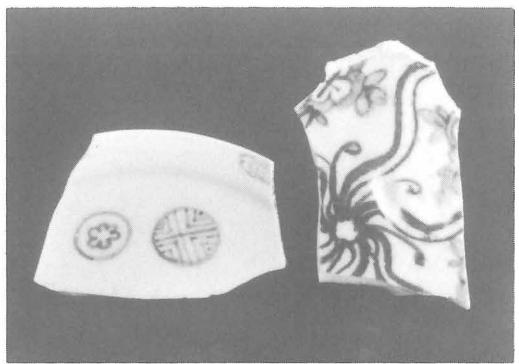
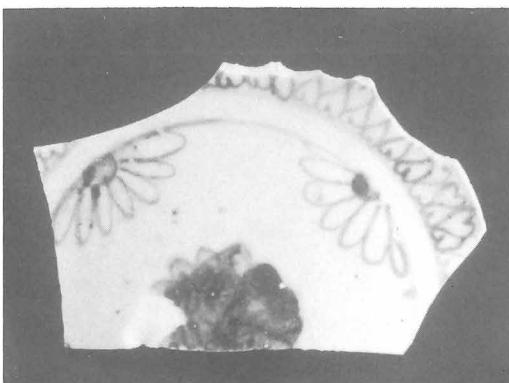
6. 染付鎬手碗 (同上CTⅡ層出土)



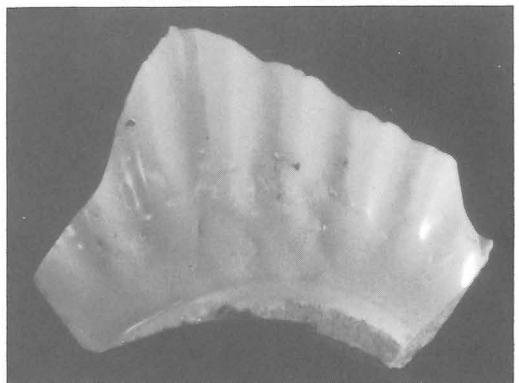
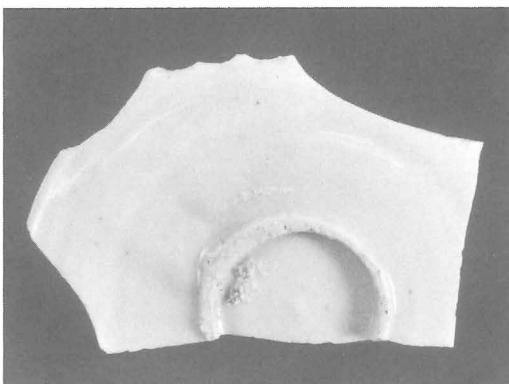
7. 染付碗  
(同上CT、左は①地点粘土中、右はV層出土)



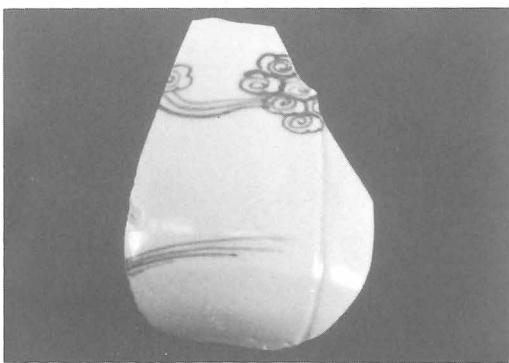
8. 染付菊花文皿 (同上CTⅢ層出土)



2. 染付皿  
(小溝上窯C T、左はⅢ層、右はⅡ層出土)

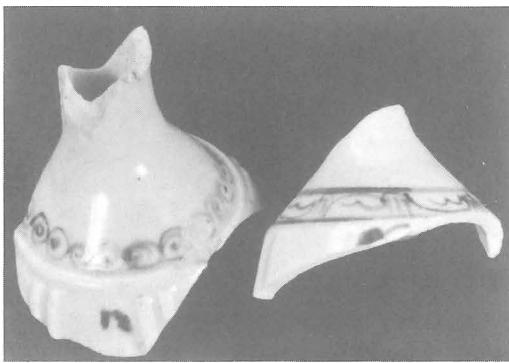


1. 染付菊散文皿 (小溝上窯C TⅢ層出土)

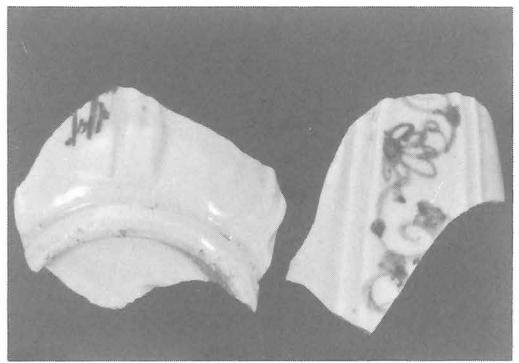


4. 染付飛雲文輪花鉢 (同上C TⅣ層)

3. 染付鎬手鉢 (同上C TⅠ層)



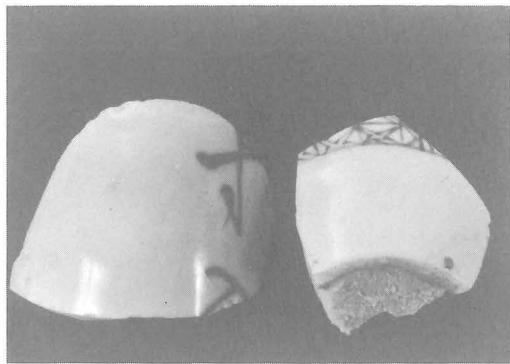
5. 染付鎬手瓶  
(同上C T、左はⅠ層、右はⅡ層出土)



6. 染付鎬手瓶  
(同上C T、左はⅢ層、右はⅡ層出土)



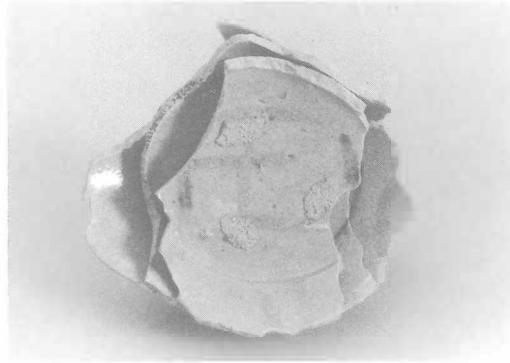
1. 染付菊唐草文瓶  
(小溝上窯C T、⑦地点粘土中出土)



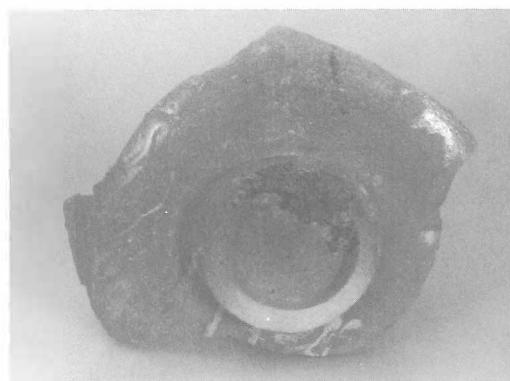
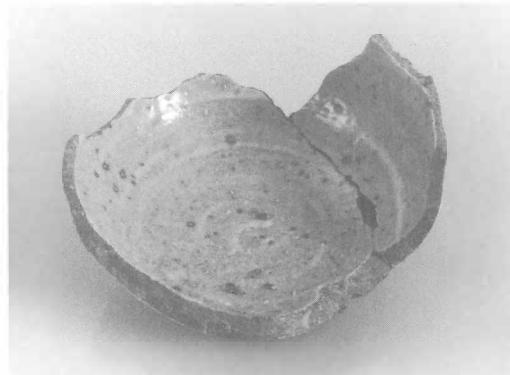
2. 染付瓶  
(小溝上窯C T、左はII層、右はIV層出土)



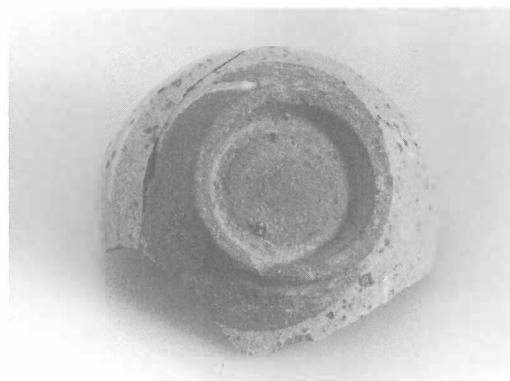
3. 陶器溝縁皿  
(窯詰時のまま熔着、砂目積) (同上 C TNo.10)



4. 鉄絵陶器皿 (同上 C T⑯の層出土)



5. 鉄絵陶器大皿 (同上 C T地山直上出土)



6. 刷毛目陶器碗 (同上 C TIV層出土)

肥前地区古窯跡調査報告書 第4集

## 楠木谷窯・小溝上窯

昭和62年3月31日

発行 佐賀県立九州陶磁文化館  
佐賀県西松浦郡有田町中部田ノ平乙3100-1  
TEL 09554-3-3681

印刷 山口印刷株式会社  
佐賀県伊万里市二里町大里甲2476番地2